

---

# 【企画】覆面小説家になろう～雨～

覆面作者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【企画】覆面小説家になろう〜雨〜

### 【Nコード】

N4975E

### 【作者名】

覆面作者

### 【あらすじ】

18名の名を隠した作者による5000文字以内の短編集。貴方は彼らの覆面を剥がすことができるでしょうか。

## No.00 はじめに

この作品は【覆面小説家になろう】という企画の短編集です。  
今回のテーマは「雨」

18人の覆面作家たちが描く雨の物語をご覧あれ。

そして貴方は、彼らの覆面の中身を当てることができるでしょうか。

推理も併せてお楽しみください。

一部作品は7月2日の企画終了後、各作者様のIDにて再登録されています。  
ご了承ください。

以下、各話あらすじです。

No.01「めぐりめぐってめぐるもの」

妻を失い、生きることと専念する父親。妊娠し、結婚を決意した娘。父と娘、二つの視点から描かれる、めぐりめぐる一つの物語。

この作品は作者様のIDにて再投稿されています。

No.02「雨はこの穢を、洗い流してくれるのだろうか」

俺と彼女は約束したんだ。この雨に汚れた血を洗い流そうって。ほんとに、ただそれだけだった筈なんだ……。

No.03「訪れる人」

優しい雨の午後、老女の茶室を訪れたふたりの客人  
雨が上がるまでの、ひとときのお話です。

No.04「走馬灯の刹那にめぐる貴女」

貴女は、策を講じて貴女を娶った私を今でも恨んでいるだろうか？ 恋の罪を背負ったある男の、臨終の刹那にめぐる想いを綴ったほろ苦い恋の物語。

この作品は作者様のIDにて再投稿されています。

No.05「Under the Sun」

学校帰りに突然の雨に遭った中学二年生の少女・翔<sup>かける</sup>。誰もいない神社で、見知らぬ青年と雨やどりすることになってしまい、何かされるのではないかと緊張していたが……。少女と青年のほのぼのストーリー。

この作品は作者様のIDにて再投稿されています。

No.06「恋の空模様」

あの人に会えるのは、雨の日だけ。ある梅雨の日々、とある女子高生の、ささやかな恋模様。

No.07「骸の雨に花が咲く」

異形の雨が降り注ぐ世界。それを打ち砕く高機動兵器『人傘』。人傘を作る換装技師の青年は、今日も独り、ため息混じりに暗雲を見上げていた。そして彼の傍らに『彼女』が現れる……」

No.08「Early summer rain」

大学四年になった僕は高校最後の年、ケンジと走り、あの日気まぐれな五月雨が降っていた事を思い出す。あの日と同じ、気まぐれな五月雨の降りしきる山林の車道を僕は行く。同じ時間に追いつく為。

この作品は作者様のIDにて再投稿されています。

No.09「一面の雨」

雨は何にでも、平等で均等。

雨は決して嫌いではない。でも、そんな日に結城亜矢華が見てしまったものは……。救いはあるの？

悲しい恋愛話です。

No.10「雨を降らせたのは誰？」

彼女は問う。誰が雨を降らせたのか？ 絶望は心を彩る。彼女は甘い蜜を吸って笑う。

No.11「空色パラソル」

傘好きの莉子が夕立の中見かけたのは、傘嫌いの勝史。ずぶ濡れになって歩く彼の背中が気になって仕方ない。勝史が傘を差さない、本当の理由を知りたくて、莉子は必死に追いかけるのだが……。

No.12「アマゴイ」

私はお隣さんと天気の話をする。雨が降らないと困ると。

真夏のある日。ほのぼのとした私とお隣さんの会話。

No.13「未来への絶望」

ある女子高生の絶望したお話

No.14「かみさま。」

灰色に濡れた家。赤く点滅するランプ。すべてを奪い去る雨の音。この胸がふるえるとき、それは神様からの合図。

No.15「彼と彼女と夏の雨」

OLの彼女には同棲し始めた愛する彼がいた。しかし浮気性の彼はそうはいかなかった。その彼が急におとなしくなった時、彼女は……

……

No.16「つゆひめおに 桃太郎異説」

昔話・桃太郎に出てくる姫を視点にした、全く別物の話。ちなみにタイトルは言葉遊びです。

No.17「鎖雨樋」

雨の音がする。家の中、街の中、私の記憶の中。しとしとしと。しとしとしとしと。長らく降り続くこの雨に終わりはあるのだろうか。鎖樋を伝う水の行く先。

No.18「君は知らない」

主人公・拓と同級生・文月の、雨宿りの情景。拓は自分の気持ち  
を彼女に届けることができるのか。毎日顔を合わせる。それだ  
けで良いと思っっているのに、時々苦しくなる。こんな想いを、たぶ  
ん君は知らない。

以上、18編。

覆面作家名簿（50音順敬称略）

天崎剣

あんこだま

あんのーん

eleven-9

梶原ちな

北加チヤ

光太郎

こっこ

サイレンス

雑草生産者

椎野千洋

t a k a o

藤野朔夜

藤夜要

ハシルケンシロウ

牧屋美邦

マグロ頭

y o s h i n a

以上、18名。

それでは、覆面小説をお楽しみください。

## N O . 0 1 めぐりめぐってめぐるもの

### 【お知らせ】

こちらの作品は7月2日の作者発表後、ご本人の希望により作者様の個人IDにて再登録されました。

作品本文へはお手数ですが以下のURLにアクセスしてください。

作品URL

<http://ncode.syosetu.com/n5957e/novel.html>

「めぐりめぐってめぐるもの」

妻を失い、生きることと専念する父親。妊娠し、結婚を決意した娘。

父と娘、二つの視点から描かれる、めぐりめぐる一つの物語。

匿名の状態でのこの作品を読みたいという方は、こちらのURLへ  
お願いします。

<http://masquerade.kakurezato.com/01-megurri.html>

携帯版

<http://masquerade.kakurezato.com/e/01-megurri-k01.html>



また、その他の作品の作者発表はこちらで行っております

あとがきBBS

<http://atogakibbs.1616bbs.com/bbs/>

予想後の答え合わせをしたいという方はぜひ、ご確認ください。

予想はしていないけれど、どれがだれの作品か気になる方も、好きな作者様の作品がどれか確認してから読みたい方も、是非どうぞ。

それでは引き続き、覆面作家たちによる短編集をお楽しみください。  
い。

覆面小説家になろう

<http://masquerade.kakurezato.com/>

## No.02 雨はこの穢を、洗い流してくれるのだろうか

いつもの公園。いつも俺達が逢い引きを重ねていた、ひどけ人気のない、寂れた公園。

そのいつもの公園で、土砂降りの雨の中只ひたすら、彼女を待っていた。いつもとは違う想いを胸に秘め。

黒い傘をさし、それに豪快な音で叩き付ける雨音を聞きながら、雨雲が醸し出すドロドロ黒い景色に溶け込むような黒いジーンズと黒い開襟シャツで、公園中央の桜の大木にもたれ掛かる。

この豪雨は、俺達の血をどこまで洗い流してくれるのだろうか。この雨に二人の血を晒すことによつて、次に逢うときは、もっと堂々と自分達の愛を人前で示すことが出来るようになっていたのだろうか。

そんなことは解らない。解らないのだが、もうどちらも、この愛に疲れ果ててしまっていることは確かなのだ。

この、決して報われることのない愛に。

どちらとも無く、『清算しよう』という話が持ち上がる。雨の降る日がいい、そう提案したのは俺だ。雨水の川に、自分達の汚れた血を全て流し切るために。

俺達が普通にお互いを愛せるようになるために。この赦されることの無い恋愛コミュニケーションを、とつとリセットするために。

初めての出逢いは実に十九年も前に及ぶ。偶々家が近所だったらしく、幼稚園が同じだったのだ。そこから腐れ縁的に小中高大と進む道を同じくしたに伴い、お互いにとつて、お互いが、傍に居てくれないと落ち着かない存在となつてしまっていた。

二人とも、持っている両親は血が繋がっている者ではない。父親は生まれる前に既に他界していたらしく、俺の母親はやたら難産したようで、俺を産むと同時に亡くなってしまったらしい。彼女の母親も、出産時のトラブルでこの世を去っている。

中学の二年生辺りだったか、あまりにも境遇が似過ぎていていいのか、意思の疎通が完全に出来ていることに気付いてしまった。それが恋愛感情に発展するまでにはさほどの時間も必要としない。

今日と同じような土砂降りの雨の日だった。この公園で二人の身の上を確認しにいこうと、待ち合わせていた。

中学生でありながら、結婚を前提とした交際を始めた二人にとって、一番始めにやっておかなければならないこと、お互いを把握すること。

それぞれ両親から、自分を引き取ってきた施設の名を聞き出し、それが同一であることが判明したために、二人で向かうことになったのだ。

施設に到着して最初に園長から貰った言葉に、俺達は啞然とした。

「二人とも入って間もなく引き取られたからうまく出会えるか心配だったんですが、その様子だと【姉弟仲良くやってるようですね】」

時間が止まった。二人で暫く、その場を動くことが出来なかった。

土砂降りの雨。それが奏でる轟音。ドス黒い空。沼のようになつた公園。

全てがあの日と同じ状況だった。ただ、それと違うのは、今日、この日は、終わるのではなく新たに始めるための日だということ。俺達二人の血を洗い落として、全てをやり直すきっかけを作るための日だということ。

彼女の私生活が忙しくなってきたらしく、最近前よりも逢える回数が減ってきたが、それも、今日のために色々引き継がなければならぬことがあるという理由ならば仕方が無い。今俺達は、それほど大掛かりなことをしようとしてるのだ。

向こうから、足音。全てを清算するためにやってきた彼女の足音。バシャバシャと水を踏み弾きながら、俺のもとへ近付いてくる。

その水音は次第に早くリズムカルになっていく。

「ごめんね、遅くなって」

言うなり彼女は、飛び付くように抱きついた。そして、さもそうなることが必然的な流れであるかのように、俺達の唇が、重なる。

一体どれぐらいそうしていただろう。悠久とも思える永い時間。

俺達最後の愛。感性ではなく、五感から感じ取ることのできる、確かな【愛】。

どちらともなく、唇を離す。そして、土砂降る雨音に掻き消されそうな程か細い声で唇から唇へと伝えた筈の感情を、音にして伝える。

「貰おう、俺達の愛を。そのためのリセットだ」

ジーンズの左ポケットに入っている折りたたみナイフに手をかける。彼女も右ポケットをまさぐっている。あの中に、俺のと同じ折りたたみナイフが在る筈だ。この日のために用意した、お揃いのナイフが。

そして、計画通りに互いの腹部にそれを……、

突き立てた。

熱気を伴う猛烈な痛みがほとばしり、瞬く間に体力が失われていく。だが、彼女には、そんな様子は微塵もなかった。手応えがやら硬く、間違いなく傷つけてもいないだろうと思いはしたが、実際にそうらしい。

そんな中彼女は、俺の左手に対し、強烈な手刀を繰り出してくる。そしてそれは左手の甲にヒットし、その結果として、その部分に青痣を作ることになってしまった。自分でも情けないほどか細い呻きが、自然と漏れる。

そして彼女は、降り止まない雨に濡れながら、鬼のような狂った笑顔で俺の腹からナイフを抜き、俺が取り落としたナイフを素手で拾ってから、腹の傷口にしっかりとあてがい、そこにそれを、再度刺し込んだ。

「今時ライフジャケットなんざ、十万円も積めば買える時代なんだよ」

悪魔の如く口元を歪め吊り上げながら、彼女が説明を始める。

「ふん、一緒に死ぬ気なら、引き継ぎなんかほっぽって逢いに来るに決まってるじゃん」

視界が霞んできた。もう、彼女の表情も読み取れない。

「あんたが弟だって判った時点で、恋愛感情なんかとっくに醒めてるっつもの」

まるで永遠に続くかのような口撃と激痛の中、次第に目頭が熱くなってきた。この落涙が、痛みによるものでも死に瀕した筋肉弛緩に因るものでもないことは、俺自身がよく解っている。

「あとはあたし……捨てて、……呼んで『正当……だ』……い張れ……完……成立……」

駄目だ。はつきりと聞こえない。霞んでいた視界が、白い光に包まれていく。ああ、なんて気持ちがいいんだろう、あの苦痛の向こう側に、こんな快樂があったとは。

姉さんにも、教えてあげよう、この快感を……。

二千八年六月四日、あたしの弟は死んだ。名目上は、あたしを殺そうとして、返り討ちに遭ったことになっている。

実際はそうではなく、弟が計画した心中を逆手にとって罠に嵌めたのだが、警察は、あたしの思惑通りに正当防衛であるとして、捜査を打ち切ってくれた。

これで真つ当な恋愛を満喫できる。否、できる筈だったのだ。

あたしには、弟を殺した時点で既に交際していた彼氏が居たのだが、あたしも彼も、事件後から何も居ない筈の玄関から何かの気配を感じるようになってしまったのだ。

決まって、土砂降りの時に。

これだけなら、さほど回数多くないと思うかもしれないが、決してそうではない。このところ、毎日あるのだ。五メートル先も見えなくなるほどのひどい夕立が。

ニュース番組の特集や、ワイドショーなどは、強引に地球温暖化と結び付けてしきりに報道している。それほど明らかな異常気象だった。

今もまた、ワイドショーいわく『気温が高くなったため、例年以上に海水が蒸発しているがために、雨雲が発生しやすくなっている』ことによるらしい夕立が、この世のものとは思えないレベルの騒音を撒き散らしながら、そこら中に叩き付けている。ベランダに弾ける雨水が更に視界を利かなくし、まるで窓にスクリーンセイバーでも掛かっているかのような惨状だ。

ヤツが来た。いつものように玄関に佇む、インビジブルな何か。その正体が弟であろうことは予測がついているのだが、姿が見えないだけにどうしようもなく不安になってしまう。般若心経でも知っていれば効果があったのかもしれないが、それを知らないあたしの口からは一向宗徒でもないのに必然的な流れとして、

「南無阿弥陀仏」

という経文が連続して出てくることになる。

「駄目だよ姉さん、因果応報は浄土真宗の教えなんだから。それを相手に浄土真宗の経文は通じないよ」

やはり弟だ。そして、あたしに何かしようとしている。因果応報という言葉が示すもの、あたしが刺したからこいつが死んだ。この原因が招く結果が何なのかは、もはや火を見るより明らかだ。

「やめて。助けて。殺さないで」

自分でも驚くほど冷静な声色で、命ごいを始めてしまった。情けないほどに震えながら、ジリジリと後退していく。

「姉さん、死ぬのって凄く気持ちいいんだよ」

ああ、殺す気だ。この言葉によって、それは確定してしまったのだ。この間にあたしの背中へ、ベランダの大窓に張り付いてしまった。もはや逃げ場はない。

「だから、姉さんにも教えてあげに来たんだ」

インビジブルな弟がそう言った刹那、背にしていたベランダの窓が突然われた。そして、背から腹部にかけて、熱痛い激痛。恐る恐る下に目を向けたあたしが見たものは、血にまみれながら不気味に輝く、臍近辺から不自然に突き出た巨大な硝子片だった。

瞬く間に力が抜け、思い音を発して尻餅をつく。次第に、上半身を持ち上げていることもままならないほど、脱力してしまう。

腹が痛い。只ひたすらに痛い。痛い痛い、痛い。

しかし、その痛みも全く無くなり、意識がホワイトアウトする直前にそれはやってきた。



あれ？　なんか、気持ちいい……。

この気持ち良さ、彼にも伝えてあげたいなあ。

二千九年八月四日、俺の彼女は死んだ。何やら不幸な事故に遭ってしまったようで、硝子の破片で串刺しになってしまったらしい。

今年もまた気象台は、異常降雨量を観測している。そして困ったことに、彼女が死んでからというもの、インビジブルな何かの数が二体が増えている様なのだ。

土砂降りの時に限って出てくるあいつらの片割れが元カノだということは解っているのだが、やはり見えないというのは気味が悪い。

空がドス黒く染まってきた。もうすぐ、ヤツらの時間だ。そして騒音が響き渡る。

「ねえ、死ぬのって、とっても気持ちいいんだよ」

終

## No. 03 訪れる人

雨が降っている。

空は明るく空気はひんやりと澄んで冷たい。こんな日には訪れるひとがある。

もてなしの用意をしなければ

そのひとは点前座てまえに座り、居ゐずまいを正した。

風炉に小振りな丸釜をかけ、桑小卓くわこじよくには甲赤こうあかを載せ、水指みずさしは涼やかな染付そめつけだ。小さく切った釜の蓋からは一条の湯気が静かに立ち上っている。

そのひとは微笑んだ。いずれもお気に入りの道具だった。風炉先窓の外にはしつとりと雨に濡れ、落ち着きと本来の美しさを取り戻した庭木や下草が見える。遠来の客人をもてなすにふさわしい、静かな午後である。

みし……つ、とかすかに畳を踏む気配があり、点前座のそのひと和津かつは目を上げて客席を見た。

やって来たのは年若い男である。客席に座ったその男は目元も涼しげな優しい面立ちで、清潔な短髪に単衣ひつえのお召しをすっきりと着付けている。

「ようこそおいでくださいました……こんな日には、あなたが必ずおいでくださると心待ちにしておりました」

和津は微笑んで言った。

和津はそろそろ七十半ばを過ぎた頃だろうか。塩沢紬に博多をきりりと締め、背筋はまだすっと伸びているが、ていねいに結った髪はすっかり白くなり、皺もめつきり深くなった。

「あなたはいつまでもお変わりありませんね。私は……すっかり年老いてしまいました……」

「いいえ、あなたもいつまでも変わらない、私の大切なひとです」  
男も穏やかな笑みを浮かべ、静かに応えた。

薄器を取り蓋を開ける。よく篩ふるった、抹茶の良い香りが和津の鼻腔をくすぐる。

釜の湯にも煮えがついてきたようだ。雨が塵も雑音も吸い取るのか、しんとした澄んだ空気の中、松涛にもたとえられる湯の沸く音のみが茶室に満ちた。

かつん、と小さく乾いた音がした。和津が茶杓を茶碗の縁で打つたのだ。

男は茶筌を振る和津の手元を優しく見つめている。

「どうぞ……」

和津が茶碗を差し出した。それは八橋が描かれたものだったが、大きく金で接いであつた。

「これは……」

男が言い止した。

「覚えてらっしゃいますか？ ふたりで菖蒲を見に行った帰りに、あなたが買って下さったものです」

「ええ……よく覚えています……このような安物を、あなたはまだ大事に持っていて下さったのですか」

そういいながら男は目を細め、愛おしげに茶碗を撫でた。

「あの時、にわか雨に降られて……」

「そうでした。あなたはおろしたてのお召し物が濡れると泣きべそをかいてました」

男は人懐っこい笑顔を浮かべた。

「雨宿りに入った道具屋で、この茶碗を買ったのでした。茶碗の善し悪しなど、何もわからないのに……」

「あなたはあの時、仰った……雨は恵みだと……」

命を育み、この世の汚れを流し浄めてくれるものだ」と

和津が静かに言った。

「それで私も、雨の日が好きになったのです」

男がゆっくりと茶を服むのを、和津は見ていた。

雨が降るとき、私はあなたを訪れましょう。そしてあなたの肩を優しく濡らすでしょう

男からの最後の便りにはそうあった。

その手紙を書き終えて男は出撃し、異国の海に散ったと聞いた。

私は海のひとしずくとなり、やがて雲となつてきつと祖国へ、あなたのみ許へ帰ります

和津は何度もその手紙を読み返し、そのたびに涙にくれた。

雲となり、雨となつて私に寄り添ってくれたと何になるう。優しく私を見つめる目、名を呼ぶ低く艶のある声、私を抱く強い腕も熱い胸もなければいяд

だがある時、和津は確かに感じたのだ。音もなく降りしきるあたかな雨に、確かに愛しい男の気配を……

和津の思いは、近づいてきた軽やかな足音に遮られた。

襖が開いた。そこにいたのは華やかな振り袖の少女である。大きな瞳にくつきりとした眉、花のような唇をきゅつと結んだ様子は少し利かん気にも見える。肩の辺りで切りそろえたおかつぱがかわいらしい。

「智香ちゃん」

和津は微笑み、少女に声をかけた。

「よく似合っているわ……良かった。智香ちゃんもこちらへいらっしやい。お茶を点ててあげましょうね」

少女は素直に茶室へと入ると、男の傍らにちよこんと座った。

「これはかわいらしい……」

男が相好を崩した。

少女が纏っているのは肩揚げをした四つ身の振り袖である。薄紅や黄檗色の胡蝶が愛らしい、少女らしい柄行であった。

「孫の智香です。私の子供の頃の振り袖が出てきたので、もう古く

さいかとも思っただのですが、仕立て直してみたのです」

男は笑顔で和津に向けた。

「ええ、覚えていますが、この着物……よくお似合いだった。このお嬢さんのようにかわいらしくて……」

和津は頬が熱くなるのを感じた。

このひとの前では、私も少女に戻ってしまうのだろうか……と思っただ。

少女のために、和津は小服こびやくに薄目の茶を点てた。

茶を受け取った少女は、作法に適った所作でゆつくりとそれを飲み干すと言った。

「お祖母ちゃま……私、結婚するの……」

唐突な告白に、和津も男も少女を見た。

「……まあ……それは……」

しばらくの後、和津が応える。

「おめでとう存じます。……末永くお幸せにね」

少女はほっとしたような、はにかんだような笑顔を見せた。

「ありがとう、お祖母ちゃま……」

どうしても、お祖母ちゃまにはご報告したかったの」

「何かお祝いを差し上げねばなりませんね」

男も笑顔で言った。和津は微笑むと戻ってきた茶碗を清め、また差し出して言った。

「智香ちゃん、お祝いにこのお茶碗をあげましょう」

「……………」

少女の瞳が和津を見つめる。

「このお茶碗はね、お祖母ちゃまが娘の頃に大切な方から頂いたの。接いであって値打ちはないけれど、お祖母ちゃまとその方の気持ちだと思つて、受け取ってちょうだい」

少女は再び茶碗を手を取った。

「今日は本当に良いおもてなしを頂きました」

男が嬉しそうに言った。

「本当に、今日は佳い日になりました……ありがとうございます」  
和津も晴れやかな笑顔で頭を下げた。

「智香、何をぼんやりしているの？」

開いた障子から覗き込んで来た母に声をかけられ、智香は我に返った。

ジーンズにTシャツのラフな格好、胸の辺りまである髪は無造作に後ろでひとつに束ねられている。それが気の抜けた風情にならないのは、智香のほっそりしたムダのない体つきのせいかも知れないし、勝ち気そうな瞳の強い光のせいかも知れなかった。

いつの間にか雨は上がり、遅い午後の日差しが座敷の奥深くまで届いている。

「まあ……お茶の道具なんて並べて」

「形だけよ。お炭もないしね」

智香は笑った。よく見れば風炉に五徳ごとくは入っているものの、灰もなく炭もない。上にかかった釜も空、水指も空であった。

祖母が鬼籍に入ってもう十年あまりになる。生前、智香を目の中に入れても痛くないほどに可愛がってくれたそのひとは茶道の教授で身を立っていた。彼岸の人となってからは跡を継ぐ者もなく、こつこつと集めた道具も長く押入にしまい込まれたままになっていたのだが、それもとうとう明日、道具屋が来て引き取ることに決まった。両親は一人娘の智香の結婚を汐しほに家財を整理し古びたこの家を売り、もう少し住むに便の良い都会のマンションにでも引っ越そうという心づもりなのだ。

やわらかな雨が降り出したのを見て、祖母のお気に入りだった道具を出したの

は智香だ。祖母は明るい雨の日が好きだった。

雨の日には、祖母が帰ってくる……智香は祖母を送った幼い頃から、ずっとそう感じてきた。だから今日は、祖母の気に入っていた

道具を、彼のひとが使っていたように置いてみたのだ。帰ってくる祖母を迎え、もてなし、そしてどうしても告げたいことがあった。

「そのお茶碗は……」

智香が手にした茶碗を見、母が言った。

「そのお茶碗、まだあったの……お母さんがお嫁に来たばかりの頃に粗相をして割ってしまった……もうとっくに捨てたと思っていたのに……」

「お母さん知らなかったの……これはお祖母ちゃまのお気に入りのお茶碗だったのよ」

「そのあと一切茶室には近づかなかったからね。気が張るし、二度と粗相はごめんだったから」

母は肩をすくめてあっさりと言った。智香が初めて聞く話であった。

「ねえお母さん、私……このお茶碗、貰っていい？」

「どうせみんな売っちゃうんだし、残っても誰かにあげるか捨てるかだからそれは全然構わないけど」

と、母がいぶかしげに答えた。

「そんな接いだお茶碗より、もっと値打ちのあるものが他にたくさんあるんじゃないの？」

母の言葉に智香は笑った。

「ううん、これがいいの。思い出したの。このお茶碗……昔、お祖母ちゃまが、私の結婚のお祝いにこれをくれるっていったの」

「……………」

母は怪訝な表情をした。

「まだ子供のうちから、そんな約束を……」

「お母さん、お道具は私が出しておくからここはいいわよ。買い物もまだ行っていないでしょう？」

話を切り上げるように言った智香の言葉に、母は立ち上がった。

「それじゃあお願いね。私に触るより、智香の方が扱いもきちんとしてるだろうし」



母は座敷を出て行き、智香はまたひとりになった。見るともなく、手にした茶碗に視線を落とす。

あの時、私はまだ十にもなっていないなかっただろうか……  
そうだ、思い出した、と智香は思った。

あの時も雨が降っていた。私は新しく仕立て上がったばかりの薄物の振り袖を祖母に見て欲しくて、祖母の茶室　この座敷へと来たのだった。

あの時、座敷には不思議な気が満ちていた。

襖を開ける前、確かに客人の気配を感じたが、座敷には祖母の他には誰もいなかった。明るい座敷で祖母はひとり茶を点てていて……

お茶を点ててあげましょう、と祖母は私を座敷に招き入れた。お茶を頂き茶碗

を返すと、それを清めてまた差し出して、こう言ったのだ。

智香ちゃん、結婚のお祝いにこのお茶碗をあげましょうね

そういった祖母はいつもと変わらない姿なのに笑顔もどこかしら輝いていて、まるで別人を見るようだった……

「……………」  
智香は手の中の茶碗を撫でた。あの時祖母がくれるといったのは、確かにこの茶碗だった。すっかり忘れていた幼い日の出来事を、今日思い出したのは偶然だろうか。雨が思い出を呼んだのか。それとも

やはり祖母は、私を訪れたのだ……と、智香は思った。  
私を祝うために、来てくれたのだ。

日差しは一層長く伸び、空気は黄金色きんに染まりはじめている。

智香は立ち上がり、縁側のサッシを開けた。草いきれを含んだひんやりした空気が室内に流れ込んでくる。

遠く子供達に帰宅を促す声が聞こえる。

雨上がりの、いつもの夕暮れである。

了

No.03 訪れる人（後書き）

桑小卓：茶道で用いる棚

甲赤：茶道で用いる茶器。薄器（薄茶用）の一種

お召し・塩沢紬・博多：いずれも生地の名称。博多は帯用

八橋：互い違いに組んだ板橋と杜若（または菖蒲）・流水が

描かれた文様

四つ身：着物を仕立てる際の、子供用の反物の裁ち方

薄物：夏用の着物

No.04 削除

【お知らせ】

この作品は作者様のご意向により削除させていただきました。

引き続き、覆面作品集をお楽しみください。

覆面小説家になるっ

<http://masquerade.kakurenato.com/>



## No.05 Under the Sun

### 【お知らせ】

こちらの作品は7月2日の作者発表後、ご本人の希望により作者様の個人IDにて再登録されました。

作品本文へはお手数ですが以下のURLにアクセスしてください。

作品URL

<http://ncode.syosetu.com/n5831e/novel.html>

「Under the Sun」

学校帰りに突然の雨に遭った中学二年生の少女・翔<sup>かける</sup>。誰もいない神社で、見知らぬ青年と雨やどりすることになってしまい、何かされるのではないかと緊張していたが……。少女と青年のほのぼのストーリー。

匿名の状態でこの作品を読みたいという方は、こちらのURLへ  
お願いします。

<http://masquerade.kakurezato.com/05|Underthesun.html>

携帯版

<http://masquerade.kakurezato.com>

[com/e/05|under|k|01.html](http://com/e/05/under|k|01.html)

また、その他の作品の作者発表はこちらで行っております

あとがきBBS

<http://atogakibbs.1616bbs.com/bbs/>

予想後の答え合わせをしたいという方はぜひ、ご確認ください。  
予想はしていないけれど、どれがだれの作品か気になる方も、好きな作者様の作品がどれか確認してから読みたい方も、是非どうぞ。

それでは引き続き、覆面作家たちによる短編集をお楽しみください。  
い。

覆面小説家になるつ

<http://masquerade.kakurezato.com/>

No. 06 恋の空模様

雨は、好き。

濡れるし、髪まとまらないし、おきに入りの服も靴も濡れるし、だからキライってトモダチ多いけど。

でもあたしは、雨が好き。

テレビが梅雨入りがどうこう言い出した、そのころだった。その日も雨で。

いつもの制服に、いつものカバンに、いつもの靴。その日違ったのはたぶん、「雨が降ってた」ってことだけ。

「志乃、おまえドジだから、すつ転ぶなよ!」

「こんなところで、大きな声で言わないでよ。恥ずかしいから」

電車に乗って通ってる幼なじみが、みんなが振り返るくらいの声で、挨拶代わりの言葉を投げる。

小中学校がいつしよで、高校になってやっと離れた。やれやれって感じ。

あたしは行き先が違って、ここからバス。駅までは近いから、ここまで歩いてきて、その先だけ乗って通ってる。

バスが来て、降りる人がどつと出てきた。それを避けながら、前の人に続いて、乗り口の階段に足をかけて。

「きゃっ……!」

そそっかしいあたし、ホントに滑って踏み外しかけた。倒れる、どうしよう。



けど幸い、何か柔らかいものにぶつかって、痛い思いしなくて済む。

「痛たたた……」

言ったのは、あたしじゃない。

慌てて立って振り向いて、どこかの知らない男子高生にぶつかったの、初めて気づいた。よろけた拍子に、足も踏んじやったみたい。

「ごめんなさいっ！」

恥ずかしくて顔から火が出そう。急いでバスに乗って、いちばんうしろのほうへ行く。

その人は、前に行っただみだった。

よかった。

これでそばに来られたら、あたしもう、バス降りちゃうと思う。

でも、どこの人だろう？

いまだき珍しい、うちの学校とよく似た、詰襟の制服だった。

この路線を使う高校って、たしか幾つかあったと思う。けど詰襟なのは、うちの他はどこだったろう？

気になって、バスに揺られながら考える。

詰襟で、この路線でって言ったら。

「一高？」

思わずつぶやいちゃって、周りの人が変なふうに思ったんじゃないかって、また顔が赤くなっちゃったり。

けど、きつとそう。このバスに乗るのはほかにないって、りえが言ってたから。

頭いいんだな、って思った。この辺でいちばんの高校だから。

あたしの高校なんて、ほんとに並もいいところで、誰でも行けちゃう普通のところなのに。

そんな人の足踏んじやったんだって思ったら、よけい鬱になっちゃって、どんよりした空を見るのも嫌な気分だった。

翌日もまた、朝から雨。今年はわりと、雨が多いと思う。

「うっとおしいなあ」

思わずそんな言葉が、口をついて出てみたり。

雨の日のバスは、車内でも濡れるからイヤ。自分の傘だったり、ほかの人のだったり。

靴下の替えとタオルは持ってきたけど、制服の替えなんてないし。

それにしても昨日みたいなこと、しないようにしなくちゃ。

そんなこと考えて、ちよっと力入っちゃったり。

「オッス、志乃！ 長靴はかねーのか？」

「履くわけないでしょ。早く行きなよ、また乗り遅れちゃうよ？」

「うお、ヤベえ、じゃあな！」

幼なじみだったら、濡れててすべる駅の階段、二段抜かしで駆け上がってた。

運動神経いいヤツだから転びそうになくて、それはちよっと羨ましいなって思う。

それから、バスの列に並んで。

「あの……」

声かけられて振り向いて、心臓が止まりそうになった。

あの人だ。

顔なんてよく覚えてなかったのに、そんな直感。

「あのと、その、大丈夫？」

「あ、はい、だいじょうぶです、っていうか、その、こっちこそすみません！」

なんかもう、自分でもなに言ってるんだかよく分かんなくて、すつごく自己嫌悪。

きつとあたしいま、顔なんて真っ赤。

だって一高の人の足踏んじやって、そのままロクに謝りもしないで、しかも向こうからまた声かけられてとか、恥ずかしすぎ。

「えっと、あの、あたし中央校で、だからいつもこのバスで」

ああもうサイアク。あたしってば、なんで自己紹介とかしちゃうてるの？

「そう思ってた。その制服、珍しいから」

「あ……」

たしかにそうかも。

うちの高校って、女子はセーラー服。だから有名デザイナーが作った制服なんかと比べるとイマイチ。

それなりに人気はあるらしいけど、デザインとか色とか古いし。

「この制服、でも、やっぱりイケてないから」

「そうかなあ？」

びっくりして顔を上げる。

「そう、ですか？」

「うん、いいと思う」

自分のこと褒められたとかじゃないのに、なんか顔がほころぶ。それから、気づいた。

「やだ、バス……」

「あ、行っちゃったね」

二人で思わず笑っちゃったり。

「俺、ふだんはチャリでさ。雨んときだけ、バスなんだ」  
そうなんだ、と思った。

そして雨も悪くないな、とも思った。

その日からあたし、バカみたいだと思ったけど、てるてる坊主逆さに吊るしたりして。

一高のあの人は言ってたとおり、雨の日だけバス。  
会えるのは、雨の日の朝だけ。だから雨が待ち遠しい。それが一ヶ月くらい続いている。

幸い今年は雨が多くて、あたしにとっては嬉しかった。何回会えたかな？ 毎日じゃないから、ぜんぶあわせても十回ちょっとかも。

「志乃あなた、このごろどうしたの？ まあちゃんと早く家を出られるなら、それに越したことはないけど」

お母さんとか、そんなこと言う。

「だって、もう高校だし」

テキトーなこと返しとく。ほんとのこととか、知られたくないし。

ともかくいつものバスに遅れないように、早めに家を出て、ちょっとつきつきしながら傘さして歩いて。

あの人は今日も、同じ時間に来てた。

「おはよう、ございます」

まだいまでも挨拶するとき、すっごくどきどきする。

一高なだけあって、話しても頭がすごくいいの分かるし、いろんなこともちゃんとしてるし。

やっぱり違う世界なんだなあ……って思ったり。

そうやってるうちに、なにがどうなったのか、誕生日の話になった。

「あたし、十二月二十四日で」

「クリスマスイブ？ 覚えやすいね」

いままで何回言われたかわかんないことを、また言われちゃう。

「けど、そのせいでプレゼントとかケーキとか、一回にされちゃうて」

「あー、そうなっちゃうんだ。俺はふつうの日だから、それはなかったな。こんどの十二日だし」

「あ、じゃあもうすぐ？」

「うん。」

あ、降りないと」

ちょっと会釈して、彼がバスを降りる。それを見送りながらあたし、ほんのりハッピー気分。

とつても、いいこと聞いた。

何か贈ろうかな……。

次の日曜日、あたしは隣駅の街に買い物に出た。

昨日も今日も珍しく、いいお天気。だから一気に夏模様。

ホントは仲よしの子といっしょの予定だったんだけど、急に都合悪くなっちゃって、でもあたしは買わなきゃいけないくて。だから、ひとり。

いっしょにお茶したり、したかったんだけどな。

ひとりで歩いているのって寂しいから、どうしても必要なものだけ買って、さっさと帰ろうとして。

そうだ、って急に思いだした。

もうすぐ七夕。それが過ぎたら、あの人の誕生日。

もうちよつとで梅雨明けしそうだし、そのあとは夏休みだし。そうしたらもう、会えないだろうし。

だから、何かプレゼントしようかな、なんて。

でも、何を贈ろう？

おかしなもの贈ってハズシたら、すごい嫌われそうだし……。

ハンカチとかつままないし、ノートとかペン類じゃ小学生みたいだし。女子ならカワイイ系で大丈夫だけど、男子ってなにがいいんだろう？

って、その前にいきなり贈ったりして、へんな人と思われたらどうしよう。

なんか頭の中がグルグルしてきちゃって。

それできつと、ぼーっとしながら歩いてたんだと思う。前から来た人に気づかなくて、ぶつかりそうになった。

「ご、ごめんなさい!」

慌てて頭をさげる。

ほんとにあたしってば、そそっかしい。

「だいじょうぶ？

あれ？」

声を聞いて、驚いて顔を上げて。

「朝の……」

いつもバスで会う、あの人だった。

そして隣に、手を繋いでる可愛い女子。

「カズくん、知り合い？」

「あ、うん、知ってる子」

頭よさそうな、あたしと同じくらいの年の女の子だった。

「ごめんね、大丈夫だった？ カズくん、いつもボーっとしてるから。」

ほら、ちゃんと謝りなよ」

「あ、その、ごめん。大丈夫？」

促されて、彼が謝る。

カノジヨだ。

そう直感した。

「ホントにごめんね、この人いつもこうなの。クラスでもボーっとしてて、先生の話聞いてないし。」

なのになんで、成績だけはいいかなあ？」

同じ高校で、同じクラスで、彼と手を繋いで歩ける子。

「ユミ、ふつう赤の他人にそこまで言うか？」

「だって事実でしょ。」

怪我とかしてない？ 服、だいじょうぶ？ あ、そうだ、よかつ

たらお茶しない？ お詫びにおごるから」

明るくて、誰とでも仲よく出来て、よく気がついて、頭もよくて。

こんな人と比べたら、あたしって……。

「あの、ホントに大丈夫です。ごめんなさい、失礼します！」

逃げるみたいにして、そこから離れた。

なんだか涙が出てくる。

あたりまえ、だよな。

よく考えてみれば、頭がよくて優しいあの人に、カノジヨがいな

いわけない。

なのにあたし、ちよつと喋ったくらいで舞い上がったちゃって。

ばっかみたい……。

自己嫌悪満載で、駅前でため息。

「なんだ志乃、おまえこんなところで、何してんだよ！」

いきなり大きな声で呼ばれて、そっちを見る。

幼なじみの隼人だった。

「なにつて、買い物。もう済んだから、帰ろうかなつて。てかあんなこそ、こんなところで何してんの？」

部活か試合の帰りなのは、格好見れば分かるんだけど。でもわざわざこの駅で、電車降りた意味がわかんない。

「何つて、腹減っちゃつてさ。家のほうまで行くと、ロクな店ねーじゃん」

「なにその理由」

なんかもうコイツったら、いつもこんな。

「てかさー、おまえも食わね？ いつも行く店のオバチャン、たまには誰か連れて来いつてウルセーんだよ」

「ふつうさ、そういう理由で女の子誘うかな。誰でもいいみたいじゃない」

ほんとデリカシーないつて言うか、呆れちゃう。

「ともかく行こうぜ。腹減つて死ぬ」

「もう……」

仕方ないから、ついてくことにする。

でもおかげで、ちよつとだけ気が晴れた。

ふと見ると、通りに設置されてる大型スクリーンが、天気予報映



してた。梅雨明け宣言だ、って言ってる。

雨は好き。でも嫌い。

そしてもう、青空の夏。

## No.07 骸の雨に花が咲く

澱んだ大気が唸りをあげて、暗雲から雨を呼んでいる。

呼ばれるのは禍々しき恵みの骸雨<sup>むくろあめ</sup>。

透明シールドに覆われた哭点観測室<sup>くくてん</sup>で独り、椅子に座りながら無精髭を撫でる僕の前を、人傘達<sup>ひとがさ</sup>に打ち砕かれた不気味な雨の死骸が、ポトポトと落ちていた。

それは黒い外骨格であり、湾曲した細い脚であり、重油じみた体液と内臓であり、紅い複眼であり、頭部から生えた巨大な角であった。

骸雨に汚され、見る間に黒く染まるシールドと、都市を覆う外殻。見慣れた光景だ。

だが、受け入れたくない光景でもある。

ため息が喉から溢れた。

「鴻上換装技師長<sup>こうじょうかみ</sup>」

僕を肩書き付きで呼ぶ抑揚に乏しい声が、背中越しに耳に飛び込んできた。

瞬間、痛みをともなって胸に湧く複数の感情。しかし、それを消し去ることに僕は慣れている。

僕は髪を撫でながら作り笑いを浮かべ、ゆっくりとした動作で振り向いた。

僕の笑みの先に、少女が立っていた。

全身を科学と鋼鉄に侵食された少女。彼女本来の肉体など、如何程あろうか。

微かに幼さの残る顔に走る、無数の手術痕と装甲板。複合センサーに換装された左目ではなく、彼女本来の黒い右の瞳が僕を射抜いている。

「雨月、メンテナンスは終わったのかい？」

僕の問いに彼女 雨月特殊換装機動兵は頷いた。

「そうか……前回の攻雨は凄まじかったからな。撃墜王の君でも無傷じゃすまなかつたから心配してたけど、大丈夫そうだね」

「はい」

無駄のない、それ故に味気ない返事だった。彼女ら人傘に人間味を求めるのは間違いだと分かっているにも、僕はいつも期待してしまう。

特に、雨月には。

僕は椅子から立ち上がると、シールドに歩み寄り、静かに右手を添えた。

手の平の向こうで、骸雨がシールド表面を滑り落ちていく。

虫の死骸……に見える。人ほどもある点を除けば。

昼も夜もなく薄暗い空が広がるようになったこの世界で、やつらを『雨』と形容したのは誰が最初なのだろうか。

世界各地の空に開いた無数の黒い孔、哭点。そこから無限に湧き出す暗雲。雲から産み出される異形。

重力に任せて降り注ぎ、硬き角にてあらゆる物を貫き破壊する者達。土に触れると液化して、そこをヘドロ化させるメカニズムは、解明の糸口さえ見つからない。

『雨』を滅ぼす術は、発生から数十年が過ぎた今も見つからず、人類は金属の屋根の下で怯えながら、やつらの猛威を耐え忍ぶより他になかった。

甲殻類に近いやつらの死骸は、積層装甲都市ノアの雨どいを滑り、集積場にて山となつて蓄えられ、貴重な資源として利用される。雨どもにより地上のほぼ全てが破壊しつくされた今、食料やエネルギーなどは奴ら自身の死骸を利用する他はなく、人類の殲滅者によって命を繋ぐ現状を皮肉る者は少なくない。

僕は視線を上げ、不気味に蠢く暗雲を見つめた。

雲から黒い点が幾千、幾万も現れ、ノアに降り注ぐごとくしている。それが四散する。

ノアと雨の間を飛び交う無数の存在が雨を砕いているのだ。

あれこそ特殊換装機動兵、通称『人傘』だ。人体をベースに構成されており、多数目標への精密な同時攻撃能力と立体的な機動性能に特化した、人類の守護。毒と化した大気に耐性を持ち、脊髄と結合した十六本のマニピレーターによって強力な重火器を扱う戦闘兵器。

「今日は、どこの隊が出たのかな」

僕の独り言に雨月が答えた。質問されたと捉えたらしい。

「レイニーの部隊です」

僕の歯が強く噛み締められる。

レイニー達は耐用年数超過……そうか。今日は征天作戦なのか。

シールドに添えていた手を握り締め、透明な隔壁を拳で軽く打つ。空に閃光の花が咲いたのは、それとほぼ同時だった。

黒い雨を砕き、暗雲すら吹き飛ばす光。

目が眩む。だが、目を逸らすわけにはいかない。あれは自分が生み出した者の徒花なのだ。

涙が溢れる。閃光のせいに違いない。

雨月が僕の隣に立ち、同じように同僚の最後を見つめている。

しかし、彼女の唇は別れの言葉を紡ぐことはなく、淀みも感情もない瞳は、涙すら浮かべてはいない。

哀悼の言葉も惜別の涙も、鋼鉄の傘には不要なのだ。

無駄な期待を涙とともに拭い去り、僕は雨月の頬を撫でる。

閃光の華が消え去るまで、僕ら二人は空を見上げていた。

征天作戦により暗雲が一時的に減少したことを受け、忌象機関から、三日間は攻雨の恐れはないと言う通達が全戸に配布された。人々は束の間の平和を享受できる喜びに顔を綻ばせている。短い平和を得るために払った犠牲など、彼らは考えもしないだろう。

人傘がどのようなものであるかを考えれば、仕方がないことだっ

た。まして、それを非難する権利は僕にはない。人傘を造り出している者は僕なのだ。加えて征天の期間は人傘達を一斉メンテできる絶好の機会でもある。むしろ、都市を護る最大の兵器を常に万端に保つため、耐用年数の過ぎた機体から自爆させて征天という猶予を作り出しているのが現状だ。

生きると言うことは、常に犠牲の上に成り立っている。不変の真理だ。

骸雨から作られた不味い食事を終え、ドックにて人傘達のメンテナンスに取り掛かる。

今日は、先に臨時メンテナンスが終わった雨月と、今日の護衛当番である十五体の人傘を除き、二百三十体全ての人傘にオーバーホールを実行する。人傘の耐用年数を延長するためには欠かせない作業だ。

レイニーが作ったこの時間を無駄には出来ない。僕は部下たちに指示を出し、迅速と正確さを旨に作業を開始した。

各機体の分解が終了し、フレームアライメントにとりかかり始めた頃だ。

忌象庁予報員の女性が僕の下を訪れた。顔色が青く見えるのは、ドックの明かりのせいだろうか。

作業の手を止め、僕は彼女と相對した。

「どうした？」

ドックを見渡し、苦虫を噛み潰す予報員。オーバーホールの光景が気に障るのだろうか。

「……鴻上さん、ちょっと来ていただけますか」

言い終わるより早く、彼女は踵を返した。

声に只ならぬものを感じ、僕は黙って彼女の後を追った。

向かう先が管理局長室だと分かった瞬間、僕は最悪の事態を想定しなければならなくなった。

「来たか」

ノアの最高責任者たる管理局長ウトナピシユティムは、円卓に座

り、沈痛な面持ちで僕を迎えてくれた。

他にも防衛司令官、技術局最高顧問、医局医術長、忌象機関長官……各機関トップが席を共にしている。

確信した。

事態は予断を許さない状況に陥っている。

それがどんな状況か解らなくても、事の重大さだけは、部屋に漂う絶望感のおかげで愚鈍な僕にも分かる。

直接の上司たる初老の男性　技術局最高顧問が僕に問い掛けてきた。

「鴻上君。単刀直入に聞く。人傘を半数出動させるのにどれくらいかかる？」

「はっ。オーバーホールを終わらせ、全装備を再装着することも含めまして、半数出動にはおよそ一日かかるかと」

「一日か……」

局長が唸る。他も同様に。

技術局最高顧問は質問を変え、再度問い掛けてきた。

「では、今すぐ出動可能な機体は？」

「当直の第十二部隊と、臨時メンテナンスによってオーバーホール済みの雨月特殊換装機動兵、合わせて十六体です」

僕の返答に全員が顔をしかめる。

「十六体……」

「まずいな。足りない」

「では、当初の予定通り……」

「それしかないな……」

お偉いさん方が緊迫した内容を繰り返す。それがまとまるまで、僕はただ黙って待っていた。

「鴻上君」

背筋が伸びる。局長に名前を呼ばれたのは初めてだった。

「はっ」

「十六体全機にHTEを装着し、出動させたまえ。大規模征天作戦

を開始する」

局長の言葉は雷撃となり、僕の意識を感電させた。

レイニー隊の自爆による征天は、予想に反して一日も持たなかった。あと数時間のうちに豪雨が降ると、忌象庁が確定予報をはじき出したのだ。

今までにないことだった。例外と言っていい。

その例外が致命的だった。忌圧変化から導き出された予想攻雨量は、三百ミリ前後。攻雨量は都市外殻に対する雨の貫通力を意味する。防ぎきれなければ外殻に穴が開くのは必至だ。

それでどうなるか。

数千万という雨の侵入、猛毒と化した大気の流入。都市が滅ぶのは確実だ。

最悪の事態を避ける為に僕に命令が下された。

暗雲を払う高性能サーモバリック爆弾 H T E を装着した十六体の人傘による自爆。

攻雨量から計算すれば、通常の殲滅作戦を行うには十六体では全く足りない。最低でも、その五倍は欲しい。そうすればせめて雨月は待機に回せる。他の機体の生存確率も跳ね上がる。

だが、現実には残酷だった。

十六体で三百ミリの雨に対抗するには、全機による征天作戦しか道がない。

レイニー隊と同じ道を、僕は彼ら全員に歩ませなければならなかった。

何を悩む。数十万の住民と十六体の人傘。天秤にかけるまでもない。

僕は自分にそう言い聞かせながら、作業を進めていった。

「調子はどうだい、雨月」

ドックには、僕と雨月しかいなかった。他の人傘は射出カタパル

トで待機している。

雨月は、僕自らの手でHTEを装着した。誰にもやらせたくはなかった。

背中から生えた傘の骨のようなマニピレーターを駆動させ、雨月が各部の自己点検を開始する。

「問題ありません」

「そうか」

僕は微笑みかけた。

雨月の表情は変わらない。

僕はもう十数年、この変わらない表情を見ている。

雨月が……姉が両親を殺した、あの日から。

人傘の素体に選ばれるのは罪人達。この街で死罪を犯した者はみな、死した後も人傘となって罪を償う。

「罪か……」

姉が罪を犯したのは、僕のせいだというのに。

その姉を換装し、人傘に仕立てあげた僕は人間と呼べるのか。人傘達に感じる哀れみは、罪という雨から心を守る傘でしかない。

僕は、雨に濡れることを恐れていた。

「鴻上換装技師長。準備が完了しました。出勤致します」

意識が現実に戻される。

雨月は僕を見詰めていた。

「……分かった」

僕の了承を受け、雨月がカタパルト室へ向かう。

遠くなる。

幾度も見送ってきた彼女の姿。これで、二度と見ることは叶わない。

「……二度と……」

気付けば、僕の頬を雨が濡らしていた。卑怯者の雨だった。

長きにわたり、僕の思いを閉じこめてきた堤防が決壊する。

「……姉さん！」



十数年ぶりに、雨月を姉と呼んだ。

雨月は反応しない。

当たり前だ。そう造ったのは僕じゃないか。

どこまで僕は自分勝手なんだ。

自己嫌悪に陥る僕をよそに、カタパルト室の扉が開く。

そこで雨月は足を止めた。

何が起きたのか、僕には分からなかった。

ゆっくりと振り向いた雨月は笑っていた。

がさつで、乱暴で、優しかった姉の笑顔。

そして一言だけ僕に残し、姉は扉の向こうへ消えていった。

今、思い知った。

自分の罪の重さを。

失おうとしている者の大切さを。

僕は嗚咽すら漏らせずにいた。

甲高いカタパルトの射出音が、ドックの中に響き渡る。

その数……十六回。命の数そのもの。

人傘のために鳴り響く鎮魂の鐘音が、僕の涙を振るわせていた。

華が咲いていた。

闇を払う十六の光の華が、骸の雨の中心で。

哭点観測所に独りきりの僕。

傍らには誰もいない。傍らにいてくれた人は華となって空にいる。

大切なものを失った。

それでも僕の手は、これからも雨を凌ぐ傘を作り出すだろう。

誰かを護るために。

何かを犠牲にしながら。

それでいい。姉が最後に僕にくれたあの言葉がある限り、僕はもう迷うこともない。

僕は消え行く閃光の花を見つめながら、姉の名を呟いた。

そして華が消えると同時に、出口に足を向けた。

不意に雨月の言葉が耳の奥で蘇る。

僕の声が、その言葉をなぞった。

「生きて……か」

姉の最後の願いを胸に、僕は人傘達の下へ向かっていった。

雨月達くれた晴天のしじまを、決して無駄にしないように。

## No.08 Early summer rain

### 【お知らせ】

こちらの作品は7月2日の作者発表後、ご本人の希望により作者様の個人IDにて再登録されました。

作品本文へはお手数ですが以下のURLにアクセスしてください。

作品URL

<http://ncode.syosetu.com/n6234e/novel.html>

「Early summer rain」

大学四年になった僕は高校最後の年、ケンジと走り、あの日気まぐれな五月雨が降っていた事を思い出す。

あの日と同じ、気まぐれな五月雨の降りしきる山林の車道を僕は行く。同じ時間に追いつく為に。

匿名の状態で作品を読みたい方はこちらのURLへお願いします。

<http://masquerade.kakurezato.com/08/early.html>

携帯版

[http://masquerade.kakurezato.com/e/08/early\\_k01.html](http://masquerade.kakurezato.com/e/08/early_k01.html)

また、その他の作品の作者発表はこちらで行っております

あとがきBBS

<http://atogakibbs.1616bbs.com/bbs/>

予想後の答え合わせをしたいという方はぜひ、ご確認ください。

予想はしていないけれど、どれがだれの作品か気になる方も、好きな作者様の作品がどれか確認してから読みたい方も、是非どうぞ。

それでは引き続き、覆面作家たちによる短編集をお楽しみください。  
い。

覆面小説家になろう

<http://masquerade.kakurezato.com/>

雨が降っている。

遠い空から落ちてくる、水。

結城<sup>ゆづきみやか</sup>亜矢華は、そつとため息をついた。

別に、雨が嫌いなわけではない。どちらかということ、好きだ。

誰にでも平等に、何にでも均等に降る雨。

そう、嫌いではないのだ。

たとえソレが、憂鬱という心の闇を運んできたとしても。

灰色に埋めつくされた空はそれだけで憂鬱の材料になるものだ。

だから、亜矢華はなるべく気にしないふりをしていた。気にしすぎると、気が塞いで、しなくても良い暴言を、家族に対して吐いてしまう。そして、それがまた、憂鬱をうむ。

悪循環の出来上がりだ。

亜矢華はそれが嫌いだ。だから、雨の運ぶ憂鬱に背を向ける。

見るのは、平等で均等なところ。

どんなモノにも平等で均等な雨。

ナニに対しても、雨は降りそそぐ。そして、すべてをさらって、キレイにしていく。

だから、嫌いではないのだ。

今の亜矢華にも、雨は降り続いてた。

制服はじつとりと濡れて重い。

少しだけした化粧はもうすべて落ちている。もともとが、友人たちがしてるから、との理由で、ほんの少しファンデーションをつけて、色のつくリップクリームをしているだけだから、気にはしていない。

でも、きつと、今の自分は最低に醜い。と亜矢華は思う。

閉じた瞼の奥、困ったような、あきらめたような、先輩の姿。見たくなかった場面。

知りたくなかった場面。

それを亜矢華は見てしまった。

だから、雨に濡れたまま、公園のベンチに座り込んで、動けないでいる。

傘は持っていたはずだった。

でも、鞆と一緒に学校に置き去りのまま、公園まで来てしまったのだ。

滑稽すぎて、笑いも起きない。

もつとも、こんな状態で笑っていたら、交番につれて行かれてもおかしくはない。そのまま病院行きだろうか。

亜矢華は憂鬱に背を向けながら、憂鬱なことしか考えてなかった。器用だな、なんて自嘲してみる。

そんなことをしても、事態の変化はないし、先輩が探しにきてくれるわけでもない。

理解したくない現実を置いて、亜矢華はずぶ濡れのまま、そこを動かない。

白いカッターシャツの背中。見慣れた黒髪のツンツン頭。

「先輩」

と声をかけようとして、亜矢華は気付いた。先輩の向こう側。見知らぬ女の姿。

知らないだけで、この学校の生徒なのはわかる。亜矢華と同じ制服姿。

違うのは、長い黒髪。

規律が厳しくて、髪を染める生徒はいないから、皆黒髪なんだけど。

でも、ほんの少しの化粧は、先生に見つからないようにしていた。亜矢華と違って、キレイで凜とした女生徒。

亜矢華は肩で切り揃えた髪をくしゃり、とかきませた。  
誰？

女生徒は、先輩と親しそうに話している。  
何で？

「あの後輩ちゃんと、いつまでままごとしてるつもり？」  
女生徒の声が聞こえた。否、聞こえる距離まで亜矢華が移動したのだ。

二人は亜矢華に気付いていない。  
ままごと？

「本気じゃないんでしょ？」

声は嫌なことを伝えてくる。

先輩、違うって言って。

亜矢華の願いは叶わなかった。

「そうだね。どうしようか、悩んでるところ。いい加減、君のことに気付くと思ってたんだけどね」  
な、に、言ってる、の？

ガサリ

亜矢華が踏んだ足元の草。

音の発生源を求めて、先輩が亜矢華を見る。そして、女生徒も、視線を動かした。

亜矢華は動けなかった。

声も出せなかった。

何で？どうして？

疑問符だけはとりとめもなく溢れ出て。でも、それも声にならな  
きや伝わらない。

「あらあら、盗み聞き？」

女生徒のバカにした声。

それさえも、素通り。

先輩は何も言わず、どうしてか、困った表情。

知られたくなかったの？知るまで、騙し続ける気だったの？

亜矢華は声にならない非難で先輩を見つめる。  
やがて、あきらめた表情の先輩が亜矢華の瞳に映る。

「ひどいよっ！」

それだけ言つて、亜矢華は走つた。

そのまま、何も持たずに校門を出て……。

気付いたら、雨が降りはじめていた。

あの場所に行つたのは偶然だった。

昔、先輩に告白した場所。

ただ、懐かしくて、ただ、それだけで、あの場所に足を向けていた。

でも、辞めれば良かった。あんな場面、あんな先輩、知りたくなかつた。

亜矢華の顔は雨と涙で濡れる。肩で切り揃えた髪からも、ポタポタと水が落ちている。雨と混じりあつて、もう何がなんだかわからない。

ままごとだったの？

つまり、遊びつてこと？

わかりたくない現実を、亜矢華はゆつくり考える。

「亜矢華！」

ふいに聞こえたのは、親友の声。

「三咲」

疲れたような亜矢華の声に、桐生三咲きりゅうのみさきはため息をつく。

「何が有つたの？ ずぶ濡れじゃない。鞆も何もかも置いたままどこか行つちやうんだもん。探したよ？」

三咲がかかげてくれる、彼女のピンクの可愛い傘。

「傘、意味ないね。家行こう？ 服替えないと、風邪ひくから」

亜矢華の鞆も持ったまま、三咲は亜矢華を立ち上げさせる。

三咲に従いながら、亜矢華は何も考えてなかつた。

示される方向に、ただ足を向けるだけ。

「終わつちやつた……」



ポツリとつぶやいた。

「終わっちゃったの」

もう一度、ゆっくりと。

三咲は何が？とは聞かなかった。

「そう」

一言うなずいただけ。

「知って、いたの？」

知ってるわけない、と思いながら、亜矢華は問いかけていた。

「知らないよ。ほら、お風呂入って。服は適当に出しておくから。

話は後。いくらでも聞くから」

三咲はそう言って、亜矢華をお風呂場にいざなう。

温かいシャワー。

さつきまでの、体温を奪う冷たい水じゃないのに、亜矢華はホッと息をはいていた。

そういえば、三咲の家を濡らしてしまったな、といまさらながらに思う。

でも、彼女は何も言わないだろう。三咲はそういう子だ。

三咲の出してくれた彼女の乾いた服を着て、三咲の部屋に行く。

「ちゃんとあつたまつた？」

三咲は温かいココアを差し出しながら聞いてくる。

「うん」

亜矢華の沈んだ声。

「ごめん。ありがとう」

それだけ言うのがやっとだった。

「気にしないで。で、どうしたの？」

三咲の部屋。柔らかいクッションにもたれかかって、亜矢華は何度目かのため息をつく。

「うん。あのね、先輩、二股だったの。気付かなかったの。他に付き合ってる人がいるのに。でも、なのに、先輩は私にOKをくれたの。もう、わかんない」

「そう」

支離滅裂な亜矢華の説明に、三咲はそっとうなずいた。

「雨、降ってるね」

亜矢華は関係ないことを言う。忘れたいから。何もかも。

「そうよ。それであんたはずぶ濡れになったんじゃない」

三咲もそれに乗ってくれる。

「制服……」

「乾かしてるよ」

三咲はなんでもないかのように答える。

「ありがとう」

「それ二度目だよ」

笑う三咲につられて、亜矢華も笑った。

「雨が全部流してくれるから、全部忘れちゃえ」

三咲の優しい言葉に、亜矢華はそっとうなずいた。

そう、雨は何もかもをさらっていつてくれる。きっと、何もかもが、キレイになる。

「明日は晴れるって」

三咲が言う。

「じゃあ、新しい明日になるね」

亜矢華は答える。

大丈夫だよ、と。三咲がいるから、大丈夫なんだ、と。

「そう。新しい明日だ」

三咲がいてくれて、救ってくれて良かったと、亜矢華は思う。

明日からは、新しい私。

そう誓った。

No.10 雨を降らせたのは誰？

「酷い雨ね」

彼女の言葉に応える者はいない。

「まったく、本当に、酷い雨」

彼女は咳きながら雨の中を歩く。

ぼさぼさに乱れ絡みまくった金髪はぐっしりと濡れ、顔に首に背中に胸にべっちよりと貼り付いている。

着ている木綿のワンピースもびちょびちょで体に貼り付き、裾からは雨水が垂れ流れている。腰にはワンピースに似つかわしくない無骨な革ベルトを巻き、左右に銃身の長い回転式拳銃リボルバーを吊っている。土砂降りの中、彼女は歩く。腰の拳銃がカチンカチンと金属的な音を微かに鳴らす、彼女の鼓膜を僅かに震わせる程度でしかない。雨粒が地を打つ音だけが聴覚を支配する。

「誰？ この町に雨を降らせたのは？」

彼女は誰も応えることのない言葉を咳きながら、ゆっくりと歩を進める。

やがて、町の中心の広場に立った。真っ赤な広場に。

真っ赤な水溜りにブーツを突っ込ませ、赤い水でワンピースの裾を赤く染めながら、彼女は再び咳く。

「誰？ この町に血の雨を降らせたのは？」

広場の中央に設えられた処刑台には四人の男女が首に荒縄をかけて吊るされ、体を穴だらけにされていた。吊るされているのは、白い髭の老人、ドレスの貴婦人、初老のスーツの男性、あどけない少女。

広場は処刑台を中心にして、一面、雨と血の混ざり合った海で、その海にいくつもの死体が横たわる。多くは男で、その数は数十人中には女子供、老人も含まれる。

家々は焼け焦げ、崩れ、蜂の巣のように穴だらけになり、人々の

屍が転がっていた。

むせ返るほどの、雨の湿っぽい臭いと血の香り、微かな腐臭。

彼女はゆっくりとした足取りで処刑台上がり、吊るされた人々を自身が血塗れることも躊躇わず一人ずつしつかりと抱き締め、冷たい肌に、動かない唇に、開かない瞼に、何度もキスする。

一人を抱き締め、口付けする度に、びしょ濡れの顔でその名を呼ぶ。

「ああ……、祖父上、母上、父上、妹……」

彼女はいつまでもいつまでも死体を抱き締め、キスをする。

馬蹄が地を蹴り、水を弾き飛ばすいくつもの音が重なって鳴り響き、それと同時に二〇騎ほどの青い軍服を着込んだ騎兵隊が雨の力ーテンを突き破って姿を現した。

全員が無地の短衣を着込み、無地のズボンを履いている。少し上面が前に傾斜したキャップの前面には交差したサーベルのバッジを付け、騎兵用カービン銃と拳銃、サーベルを装備している。

先頭を駆ける大尉が片手を挙げ、部隊を止める。大尉の軍服も他の騎兵と外見ではさして大差はなく、襟に付けた鉄製の階級章のみ大尉と判別できた。

大尉は処刑台に一人佇む彼女を認め、彼女の名を問う。彼女は答え、大尉は拳銃を腰のホルダーから抜いた。続けて、騎兵たちも銃を彼女へ向ける。

自らに向けられた二〇以上の銃口を見つめながら、彼女は口を開く。

「聞いてもいい？」

「いいとも。しかし、手短に頼むよ。我々も暇ではないのだ。今度は君を吊るさなければならぬからな。巡回判事はまだ隣町にいる」

「何故、雨が降っているの？ 何故、この町に血の雨が降っているのかしら？」

「彼らが公正に国民と国家と憲法の名の下に行われた裁判の結果を

否定し、法廷を侮辱し、判事を攻撃し、政府軍に刃向かったからだ」  
「その裁判ってというのは？」

「解放軍幹部を匿ったその家族を国民への裏切り、国家への謀反、憲法の冒瀆、政府への反逆、安寧の妨害、秩序の破壊、まあ、その他諸々の罪状により絞首刑に処すというものだ」

「一五歳の少女も？」

その言葉に大尉は視線を一番左端に吊るされた少女、いや、屍へ向ける。何人かの騎兵もちらつとぶら下がる小さな死体を見る。中には不憫そうな顔をする者もいた。

「確かに不憫ではある。しかし、法は、法だ。解放軍の軍人を匿った者は、例え、誰であろうとも。老人だろうが女だろうが子供だろうが赤子だろうが神父だろうが天使だろうが悪魔だろうが絞首刑となることに定まっている」

「そんな下らん法律なぞで私の町に血の雨は降ったの？ 私の家族は吊るされたの？」

彼女は雨でずぶぬれになって、顔に張り付いた金髪の間髪から大尉を見て尋ねた。

「下らなくても法は法だ」

「どーせ、首都のスーツを着たノータリンドもが葉巻片手に捻り出した糞でしょうが」

「法とはそのようなものだ」

大尉は軽く苦笑してから、拳銃をくいつと動かして指示した。傍らの騎兵が頷く。

「さて、お喋りは止めにしようか。君だって風邪をひきたくはないだろう？ 捕らえろ」

大尉の指示で騎兵が二人馬から下りた。地面に溜まった水を跳ね上げ、蹴り上げながら、カービン銃片手に彼女へと歩み寄る。

「大人しく法廷に出てもらいたいものだ。君にも裁判を受ける権利はあるからな。君は明日、新聞に載るだろう。解放軍ゲリラの女王捕まる。そして、次の日の新聞にはこういった見出しが躍る。解放

軍ゲリラの女王吊るされる」

兵士が処刑台を登る間に大尉は満足そうに笑いながら言った。

「そして、その記事の隣には大尉殿の名前が？ 来週には勲章貰って少佐に昇進？」

「そーいうことだ」

彼女の皮肉に満ちた言葉に大尉は微笑み、彼女も笑みを浮かべる。彼女の左右に兵士が立った。

しかし、彼女は笑みを浮かべたまま。どころか、ますますその笑みを深める。

「……私も一つ聞いていいかね？」

怪訝な顔をした大尉は暫く逡巡してから尋ね、彼女は微笑みながら「どうぞ」と促した。

「何故、君は笑っているのかね？」

騎兵の誰もが不可解な彼女の表情に、驚き、訝り、気味悪く思っていた。彼の問いは全員の疑問だった。

「君は我々が来てからずっと笑っている。何故、君は家族を吊るされ、故郷を血塗れにされても、そんなにも愉快そうに笑っているのだ？」

「何だ。そんな簡単な質問か」

彼女はせせら笑いながら答える。

「社会の安寧を乱しても、政府軍の勇敢なる兵士や無垢の市民を殺めても、家族を吊るされても、故郷が焼かれても、あたしが笑っていられるのは何故か？」

せせら笑いは深い笑みになり、唇の両端が吊り上がり、三日月を形作る。

「それは、それがあたしの快感だから」

どこか恍惚とした表情で語る彼女に大尉と騎兵たちは気味の悪そうな表情を浮かべて彼女を見る。

「人の不幸は蜜の味」

うつとりとした顔で彼女は続ける。

「あらゆるものや人や命が奪われ、失われ、犯され、殺され、心は絶望に彩られる。その絶望と苦痛と不幸を考えると私の魂はぞくぞくと奮えてしょうがない。例え、その絶望に彩られる心が自分のものだとしても。全ての不幸は蜜の味。世界が地獄ならばいいのに。楽園なんか糞食らえよ」

彼女はにんまりと満足そうに笑い、騎兵たちを眺めた。

「理解できないようね」

「全く理解できないな。理解したくもない。とにかく、確かに確信できることは、そのような不愉快で穢れた貴様の魂もこれまでということだ。明後日には貴様はお望みどおり地獄の門の前だ」

大尉の言葉に彼女はふふんと鼻で笑った。

「お断りよ。地獄に行く前にもっと色々な絶望と苦痛と不幸を見たいからね。それから、大尉殿。貴方はあたしらを分かっていらつしやらないようだ」

「何？」

「女王アリがいたら、働きアリが一〇人はいるってことを存じていらつしやらない」

家々の中から裏から屋根の上から、何人もの農民やカウボーイ風の格好をした男たちが姿を現す。彼らの手には小銃や拳銃があつた。騎兵隊が呆気に取られた一瞬のうちに、彼女は腰のホルダーから二挺の拳銃を抜きながら撃鉄を親指で引き起こし、銃口を左右に向けたと同時に引き金を引く。

彼女の左右にいた兵士の頭が吹き飛んだ直後、大尉は悪態と共に銃をぶつ放した。他の騎兵たちも彼女や周囲に向かってカービン銃や拳銃の引き金を引く。

しかし、彼女は撃つた直後、大きく後ろに下がって、処刑台から飛び降りていた。銃弾は雨粒を切り裂きながら彼女の頭上を飛び抜けていく。

彼女は水溜りの中に飛び込み、転がりながら両手の拳銃をぶつ放す。

何発かの銃弾は血の混ざった水溜りに波紋を作りながら音速で飛び、何本かの馬脚を撃ち抜いた。悲鳴を上げながら何頭かの馬が倒れる。

次々と騎兵たちは狙撃され、雨と共に水溜りへと落ちていく。水溜りが更に赤く染まる。

「奴を捕らえろっ！ 生死は問わん！ 死体でも首一つでもそいつを引き摺って来い！」

大尉は怒声に何人かの騎兵が馬首を彼女へ向け、馬腹を拍車のついた軍靴で蹴った。

泥だらけな彼女は、

「やれやれ、私にも裁判を受ける権利はあるんじゃないっけ？」などと、呟きながら、自身へと向かってくる騎兵を見て、まず、左手の銃を向けた。銃弾が頬を掠めたが、瞬き一つせず引き金を引く。一発二発、三発目は出なかった。

それから半歩右へ移動した。そのすぐ左を馬と人間の死体が転がっていった。

「危ないな。ちょっと余裕ぶり過ぎた」

それを横目で見ながら、弾倉から空薬莖をバラバラと落とす。

その間にも彼女の頭の上を銃弾が通過していくが、命中弾はない。騎兵たちの使うカービン銃は元々命中精度が著しく悪い。揺れる馬上からの射撃では尚更だ。

騎兵も何発撃つても当たらない上に単発式のカービン銃に痺れを切らし、左腰に吊るされたサーベルを鉄の鞘から抜き放つ。すれ違い様に彼女のすっ首目指して一閃させる。サーベルは彼女の髪を切ったが、皮膚には届かず、騎兵は銃弾を受け取った。

サーベルを避けるために体をバランスが崩れるまで倒した彼女はそのまま泥の中に飛び込み、ごろごろと転がる。その上を銃弾が飛びぬけていく。

彼女の目前まで迫っていた騎兵は誰かにこめかみを狙撃されて、横様に吹っ飛んでいった。



それから彼女はよっこらせつと立ち上がり、悠然と辺りを眺めた。相変わらず激しい雨が降っている。広場には死体が十数体増えていた。

「ジエームズツ！ 何人殺ったっ！？」

彼女の怒声に近くの家の屋根の上にはいた髭面の男が吼えた。

「一六だっ！ 残りは逃げたっ！」

「大尉殿はっ！？」

「そこに転がってるっ！」

彼女は指差された方向へと歩いて行った。

大尉は仰向けになって全身で雨を受け止めていた。大自然を満喫している。といった感じではない。泥まみれで、腹は赤い。

「女王アリがいたら働きアリは一〇匹いる……か。覚えておこっ」

大尉は彼女をちらと見てから苦しそうに呟いた。

「新聞の記事は差し替えね」

「しかし、俺の記事は変わらんぞ」

「名誉の戦死で勲章授与。殉職で二階級特進で中佐？ あら、少佐

よりも上になれたわね」

「ああ、貴様のお陰だよ」

二人はそれから、はっはっはつと仲良く笑い合った。それから大尉がゲフゲフと血を吐いた。彼女はその様子を冷め切った微笑で見下ろす。

「で、女王様はこれからどうするつもりだ？」

口から血泡を吹き出しながら大尉は尋ね、彼女は笑顔で即答する。

「隣町に行って血の雨を降らせる。判事を吊るす」

「俺たちの真似か？」

大尉は大して面白くもなさそうに血を吐き出しながら笑い、淀んだ目で彼女を見る。

「その前に止めは刺してくれらんだろうな？」

「勿論。先に地獄で待ってて頂戴」

「ああ、貴様が来るのを楽しみにしてるよ」  
そして、大尉は目を閉じた。  
銃声が響き、大尉の頭が吹き飛んだ。

大きな声で彼女の名が呼ばれ、彼女はそちらに顔を向けた。いつの間にか、雨は止んでいた。

「世間話は終わったか？」

「ええ」

彼女は一瞬、吊るされた家族を見てから、仲間が連れてきた馬に慣れた様子で飛び乗る。ワンピースでも何のそのだ。

「OK！ 行きましょう。いつまでも判事を待たせるのは失礼だからね」

仲間たちが喚声と怒号を上げ、銃を高々と掲げる。

その中で、彼女は口元に泥と一緒に誰かの血が微かにこびりついていることに気付いた。それを泥ごと舌でべろりと舐め上げ、ニヤリと口の端を吊り上げながら呟く。

「さあ、血の雨を降らせよう。新しい不幸を。どれほど甘い蜜を味わえるかな？」

傘が好き。なんだろう、ステッキ代わりにして、地面を突いて歩く、あのトントンとした音が好きなのか、傘自体が好きなのか。自分でもわからないけど、なんとなく好きで常に持ち歩いている私がいる。快晴、降水率〇%の日だって、傘がないとどうも不安で持ち歩いているんだから、余程の傘依存症なのかもしれない。天気予報を当てにしないわけじゃなくて、ただ単に傘という存在が好き。

と、登下校を共にする友達の有子に言ったら笑われた。

「莉子、あんた、変わってるよ」

幼馴染の彼女曰く、私は年頃の女の子にしては変な嗜好があるらしい。殊に天気に関しては敏感で、携帯カメラで毎日のように雲の写真を撮っているところとか、公園の銅像の雨の染みを何十分も飽きずに眺めているところとか、そういうのが理解できないと言われたことがある。

だからと言って、私の趣味は傘や雨や天気 of 観察ってわけじゃない。偶々、人より傘が好き、雨が好き、空が好き。ただそれだけ。

傘に当たる雨粒の音も好き。リズムカルにポツポツ音がすると楽しくなる。終いには、「あつめあつめ、ふつれふつれ、かゝあさんが」と大声で歌いながら、くるくる柄を回し歩くもんだから、隣で歩く有子はさぞかし不快なんだろう。「莉子も幼稚園児じゃないんだからさ、いい加減、大人になりなさいよ」などと、自分もまだ子供の癖に言ってくる。

人がどうだとか、自分がどうだとか、結構無頓着でいたんだけど、最近、なんだかそういうのが気になって気になって仕方がなくなっってしまった。原因は、勝史っていう、隣のクラス男子。体がデカくて無愛想。顔は月並みなんだろうけど、口数が少ないからキャラさえ掴めない。そんなヤツをどうして気になったかっていうと、やっぱり、雨がきっかけだったりするんだよね。

その日は、突然の夕立で目の前が見えないくらいだった。私はいつも通り傘を持ってただけど、あいにく有子は忘れたらしく、仕方ないねと相合傘で帰ることにした。

女二人の相合傘つてのは、実は全然美しいもんじゃない。互いにバッグが濡れるだの、肩が濡れるだの言いながら、押し合いへし合い、やっとこさ六十センチの傘の中に入って歩く。ローファーには雨水がびちゃびちゃと入り込んでくるし、ソックスはぐちよぐちよ。風がびゅっと吹いてこようものなら、スカートからセーラーの襟まで、まるで傘なんて役に立たないくらい濡れてしまう。それでも、顔と髪の毛だけは何とか死守するぞとばかりに、二人して風に向かって傘を斜めに構え、まるで台風の実況中継みたいな勢いで歩いていく。

「夕立なんか止むまで待ちやいいのに。そんなに急いでなんかあんの？」

空模様の傘の内側と、歩道の先を交互に見ながら有子は言った。

「なにつて、そりゃアンタ、ドラマの再放送、録画してくんの忘れだからよ。私、あの回見逃してたんだよね」

DVD貸してあげようか、と言われたけど、うちにはそのDVDプレイヤーがない。かなりの時代遅れ。レンタル屋に行ってもVHS版は出てないし、親は金渋って買ってくれないし。一人で悶々と浸って観るのが好きだから、有子の家にお邪魔して観るのも気が引ける。こうなつたら、意地でも再放送を観るしかないというわけ。

「そんな理由でこの雨の中、一緒に帰る羽目になったなんて。別の人と帰ればよかったかな」

傘の中で有子は溜息をついた。

商店街のシャッター通りを抜けて、住宅地に入る。人影もなく、ひっそりした街。強い雨に打たれ、木々がざわざわと大きく揺れている。民家の軒先の鉢植えたちも、苦しそうに転がり、のた打ち回っている。自宅までのゆるい坂を上ると、昔ながらのしなびた住宅

地が見えてきた。

私たちの視界に彼が入ってきたのは、家まであと少し、この角を曲がればという時だった。こんなにも酷い雨の日なのに、そいつは傘も差さずに歩いていて。明らかに全身ずぶ濡れ、荷物も何もかも水を吸って随分重くなっているように見えた。

「何、あいつ。傘差さないで歩いてるの？　こんな日に？」

雨風と戦いながら、私は有子に尋ねた。

「ああ、勝史でしょ。あいつ、最近そうみたいよ」

隣のクラスの井出勝史というヤツらしい。そのとき見かけたのは後姿だけだったけど、以後、何故だか勝史のことが気になって仕方なくなつた。毎日、どうやら帰る方向が一緒らしい勝史の後を追つた。傘がないと不安な私は、何で傘を差さないのか、とにかく聞き出したいと思うがなくなる。有子は黙って一緒に帰ってくれたけど、今思えばもしかしたら、私の気持ちを私以上に知っていたのかもしれない。

勝史はとにかく、傘嫌いのようだ。小雨でも土砂降りでも、ヤツは傘を差さない。バッグで頭を覆うことも、雨宿りすることもない。濡れたら濡れたでジャージに着替え、そのまんま一日過ごす。何のポリシーがあつてわざわざ雨に濡れるのか。ますます理解できない。七月初め、そろそろ梅雨も明けそうなある日、勝史は急に学校を休んだ。そしてその日以来、ぱったりと帰宅時にヤツを見かけることがなくなつてしまった。

私の梅雨は、それから憂鬱になった。帰りに勝史の背中を追うのが当たり前になっていた分、魂が抜けたみたいに心がしわしわになった。それでも傘は忘れずに私の手の中にある。だけど、今までみたいに雨だからウキウキするとか、傘を地面に伝わらせて歩く振動に心躍らせたリだとか、そういうことが出来なくなつてきていた。

勝史の日常や、勝史そのものに興味があつたんじゃない。だから、隣のクラスをわざわざ覗いたり、帰るのを待ち伏せて付いて回つた

りはしなかった。偶々一緒の時間に、偶々同じ道を通るといふシチュエーションがえらく気に入っていたはずだった。

人間てモノは厄介な生き物で、いつもと同じことが急に中断されると、うずうずが止まらなくなる。その後どうなったのか、何で違うくなったのか、調べたいと思い始める。私はとうとう我慢できずに、普段は用事のない隣のクラスを、昼休みにコッソリ覗いてしまった。

「井出ならホラ、窓際が一番後ろ」

友達に教えてもらった、勝史の席。確かにヤツだ。無愛想に遠くを眺め、ぼんやりと何か考え事をしているように見える。あの大きい身体のせいか、その割りに賢そうに黒縁の眼鏡をかけているせいか知らないけど、教室の中で一人、違う空気に包まれている感じだった。

「何、井出に用なの、呼んでこようか？」

その女友達は気を使ってくれたんだろうけど、直接話すつもりなんて毛頭なかった私には大迷惑。大げさに拒否した。その声が思ったより大きかったらしく、勝史自身が気付き、こちらを振り向いた。目が合った。

初めて、目が合った。

全身が雷で打たれたみたいで、びりびりと震えた。同時に身体の底から熱いものが湧き出してきて、私は耳まで真っ赤になっていた。なんだ、なんだこの感覚。距離があるはずなのに、勝史の顔が妙にはつきりと見えてる。心臓の音が耳を支配して、何にも聞こえない。巨体が揺れ、勝史が立ち上がった。教室の後ろを通って近付き、一言。

「俺に用があるって？」

初めて聞いた太い声は予想外で、私はそのまま硬直した。近くで見る勝史はかなりデカかった。私はあんぐりと口をあけたまま、自分より三十センチは高い彼の顔を見上げた。逆光できちんと見えなかったけど、思ったより鼻が高くて、まつげが長い。そんなこと、

確認している場合じゃないのに。

「い、いや、あのさ」

しどろもどろのまま、私は何とか口を開けた。

「何で傘差ないのか、気になって、さあ」

口に出してみると、本当はこんなことが訊きたかったわけじゃない気がした。だけど、そのときの私にはそれが精一杯。女友達も、勝史も、不思議そうに顔を歪めてた。

「そういうのって、人に言う必要あるわけ？」

不機嫌そうな勝史の台詞に、私ははつとして、

「ご、ごめん、今は無しで！」

わけのわからない返答をし、自分のクラスへと駆け込んだ。

「傘を差さない勝史」という存在が、それ以上になり始めていた。

放課後、有子を残し、意を決して一人で学校を出た。パラパラと弱い雨。終業のベルが鳴ると同時に教室を飛び出す勝史を、私は小さな足で必死に追った。歩幅が足りなくて、駆け足にならないと追いつけない。校門を抜け、まだ見える勝史の背中を見失わないように駆けていく。傘の先が電信柱や通行人に当たりそうになるのを避けながら、少しずつ、勝史との距離を縮めた。

いつもならゆっくり眺める沿道のアジサイや、街路樹の新緑さえ、なぜか目に入らない。傘の柄と、その先に重なる勝史の背中。もう少し、もう少し。

「おい。お前、昼間の」

低い声に私の足は驚き、何かに激突した。柔らかい、湿った白いシャツ。少し汗臭い。

「あ！ 勝史！」

思わず呼び捨てた。勝史に追いついていたのだ。

「ホラ、傘なんか差してるから前が見えないんだよ」

勝史はその大きい手で、私の傘を取り上げた。視界が急に広がり、雨水のシャワーが顔面に押し寄せる。ウワツと、私は思わず腕で顔

を覆った。

「雨に濡れて、風邪引く年でもないだろ」

しばませた傘を渡すと、勝史は幾分か申し訳なさそうな顔をして、「そのコンビニ、寄って雨宿りしようか」

と、私を誘った。

ホットコーヒーを二つ買い、一つを私に渡すと、勝史はコンビニの軒先でぼんやりしながら寒空を眺めた。缶で暖を取り肩を縮ませていた私を見下ろして、勝史は大きく溜息をついた。

「何で付いてくるのかなって、思ってたんだ。お前ン家あつちなな。病院行かなくなったら、ばったり会わなくなつたし」

気が付いてたんだ、と知り、私は肩をすばませた。

「病院で、どこが悪いの？」

「いんや。悪いのは、俺じゃなくて、妹の方」

「え、妹さん？」

「交通事故で。まあ、この前退院できたんだけどさ」

大変だったね、なんて、月並みな言葉をかけるのもどうかと思う。こついうとき、どう話せばいいかわからない。

「傘なんか差しながら自転車乗るから事故に遭うんだよ。信号に気付かず、交差点に飛び出したらしい。だから俺、傘って嫌いなんだ」  
飲み干した缶をくずかごに入れ、やるせなさそうに、勝史は自分の前髪をかき上げた。

「だからか、だから、傘、差さないんだ」

妙に納得して、うんうんと頷いた。

「お前みたい傘好きには、わからないだろうけど、世の中にはそういう人間もいるってこと」

「……だね。　　って、ええ？　　どうして私が傘好きって、知ってるの！」

一瞬、言葉を確認した。

「お前なあ」



勝史はぐちゃぐちゃと髪の毛をかきむしりながら、眉間にしわを寄せ、恥ずかしそうに、

「高校生にもなって、雨の日に『あめふり』のうた歌いながら大声で歩いてるの、こっちが聞いてて恥ずかしかったよ。晴れても何でも傘持って振り回して。あの頭悪そうな女子は誰だって、気にもなるよ。そうこうしてるうちに、昼休みにそっちが俺のこと探しに来るし。一体、何がなんだか」

「え、ちよ、ちよっと待って」

私が歌いながら歩いていたのは、勝史を知る前のこと。その後は歌どころじゃなくて、ずっと大人しくしてたのに。どうしてそのことを……。にわか混乱し始めた私の頭は、それらの言葉から導き出されていく結果に、どんどん茹で上がっていった。

もしかして。

もしかすると。

「ねえ、いつから？　いつから知ってたの、私のこと」

涙目で見上げる私から、勝史は目を逸らす。

「さあな」

つつけんどんな態度だったけれども、どこか優しかった。

雨が上がり、日差しが雨粒を照らして眩しく輝かせた。コンビニの駐車場の水溜りに反射した光が、まるで小さな幻想世界を作っているかのように錯覚してしまう。

帰るぞと彼が私の肩を叩いた。気に入りの傘を持って立ち上がり、一呼吸。

「でもさ、傘、嫌いなんだよね」

寂しげに出た私の言葉に、彼はボソツと呟くように答えた。

「莉子みたいな傘好きも、まあ、ありなんじゃね？　否定はしないよ。人それぞれだし。人の好みを否定するほど子供じゃないよ、俺」手を振って、勝史はコンビニを後にした。

あれ、私の名前、さりげなく呼んでくれた、よね。それって、もしかして、期待していいってことなのかな。

東の空に、うつすらと虹が出ていた。  
その日から、私はますます雨が好きになった。

「今日も暑いねえ」

お隣さんは、今日も私たちの上で輝いている太陽を見つめそう言った。

真夏の太陽は容赦ない。空気も、大地も、海さえも熱くするくらいメラメラ燃える。

もう時刻は5時を過ぎていているのに、今日の太陽はなかなか沈もうとしない。

暑いのが苦手な私は、夏が来なければいいのにと毎年のように思う。一年中春ならばどんなに過ごしやすくだろうかと。

けれど季節は当たり前のように廻ってきて、夏にはその暑さで私の体を燃やそうとするし、冬にはその寒さで私を凍らせようとする。季節や天候の神様というのは本当に、意地が悪い。

聞いた話では遠い異国では一年中夏だったり、一年中冬だったりするところもあるという。まあ、それに比べたら、もしかしたら自分は幸せな方なのかもしれない。春の風の匂いや、秋の実りの喜びを知らぬ国に生まれていたら、自分の世界はもつと味気ないものだっただろう。

「天気が良いことはいいことですけど、雨が降らないのは困りものですね」

私はまだ太陽を見詰めたままのお隣さんに向かってそう言った。

「そうです。その通りですよ。雨が降らないってのは困りもんですよ。朝夕必ずと言って良いほど降っていた雨が、ここ3日ばかり降らないんですからね。このままの状態が続いたら、ここいら一帯干からびてしまふんじゃないですかね」

お隣さんはそういうと「困った、困った」とつぶやいてまた太陽を見詰めた。

「本当にどうしたんでしょうね」

私は深く頷いて、お隣さんと一緒になって空を見上げた。

晴れ渡った空には雲ひとつない。さわさわと私の体を優しくなでる風の中にも、雨の降る気配は微塵もない。

「ところで大丈夫ですか？ あっしなんか暑いのが得意な方ですけど、おたくさん……確か夏は苦手だって言ってますでしたっけ？」

お隣さんが心配そうに尋ねた。

「え？」

私はビツクリしてお隣さんを見詰めた。

なぜかって、私はお隣さんのことを「陽気でちょっぴり抜けてる」と思っていたのだ。だからこんな風に私のことを心配してくれるなんて本当に予想外だった。

「あ、ありがとうございます。大丈夫ですよ。確かに暑くてぐったりしてますけど、この間雨が降ったときにたっぷり水を取っておいたので……」

私がそう答えると、

「そうですね。そりゃ良かった。なんだかいつも雨が降ると、私ばかり水を貰っているような気がしてちょっと気になっていたんですよ。それに、なんていうか、おたくさん……あっしに気をつけてるのかなって思ってたんですよ」

お隣さんは苦笑いをした。

それを見て、私はまたやってしまったと思った。どうも私は遠慮しすぎてそれが裏目に出るといっつか、親しい方々をさみしがらせてしまつところがあるようなのだ。

「その、ごめんなさい」

私が謝ると、お隣さんはビツクリして「そうじゃなくて、そうじゃなくて」と言った。何やら、あわてているようだ。

「責めたわけじゃないですよ。いや、あっしの方こそごめんなさいです。おたくさん、本当に堅いといっつか……控え目なんですね」  
そう言つたお隣さんの声はとても優しくかった。

私は不思議な気持ちになつてお隣さんをまじまじと見つめた。

背が高く、体もがっしりしているお隣さん。夏の暑さに負けな  
いで堂々と立っている姿は、太陽に負けにくいくらいに眩しい……  
私がぼんやりしていると、

「雨、降るように歌でも歌いましょっか？」

ふいにお隣さんがそんなことを言った。

「歌ですか？」

「雨乞いの歌ですよ。何もしいよりは良いかもしれないし、それ  
におたくさん声が奇麗だから、雨が降るかもしれない」

私はお隣さんの発言にあわてた。すぐにそんなことはないと否定  
すると、お隣さんはくすくす笑いながら「奇麗ですよ」と言った。

……奇麗？

なんだかその言葉がくすぐったくて、私はそれ以上言い返せなく  
なってしまった。

お隣さんが奇麗だって褒めたのは声だけなのに、なんでだろう？  
体が熱くなってくる。それは夏の暑さに体温が上がるのとは違う、  
とても心地の良い熱さだ。

「私、音痴なんですが大丈夫でしょうか？」

私が遠慮がちに尋ねると、お隣さんはかっかとお楽しそうに笑った。

「大丈夫ですよ。ようは、思いがこもってりゃあいんです」

そしてお隣さんはお手本だと言って不思議な歌を歌った。

雨よふれふれ 恵みの雨よ

乾いた我らに 命の水を……

野太くてほんの少ししゃがれたお隣さんの声は「奇麗」と呼べる  
ものじゃなかったけれど、なぜか私にはその歌がとても心地良く聞  
こえた。

「さ。じゃあ次は二人で歌いましょう」

「はい」

私はお隣さんに合わせて一生懸命歌を歌った。

本当に私……音痴なんで聞いたものじゃないのだけれど、お隣さんは嫌な顔一つせずに いやむしろ楽しそうに歌を歌った。

こんなことをしたって、雨が降るかどうかは分からない。いいやきつと、降らない可能性の方が高いのは分かっている。でも、私は祈らずにはいられなかった。

……雨よ降っておくれ！

ほんのちよつと、通り雨でもいい。今この瞬間に雨が降ったなら、私とお隣さんが一緒に歌った雨乞いの歌が本物になるから……

すると、

トトトトトト

遠くから、雨が降る前の合図が聞こえた。そうそう、地面を揺らすトトトトトトって音。その音が聞こえると、いつも雨が降るのだ。もちろん前触れなしに雨が降ることもあるけれど、この音は雨神様がやってくる時の足音だから特別だ。

雨の神様。

彼らは雨だけでなくたくさんの命を私たちの大地に与えてくれる。

そう、私にこのお隣さんをくださったのも雨の神様だった。

私は信じられない気持ちでお隣さんを見た。

するとあちらはこうなることを予想していたようで、にんまり笑うところだった。

「どうやら来たようですよ。今日は2……いや、3人みたいです」  
私より背の高いお隣さんは遠くからやってくる雨神様の姿が見えたようだ。私は精一杯背伸びして、彼らがやってくる様子を見た。

カラフルな靴を履いた足。1、2、3……確かに3人分。  
ゆっくりとこちらにやってくる雨神様の姿が見えた。手には雨を  
降らせるあの魔法の道具を持っている。

私が雨が降るのを今か今かと待っていると、一番はじめに私たち  
の所に着いた雨神様が、

「ひまわりさん、チューリップさん、たっぷりお水あげるからね〜」  
と言って魔法の道具から雨を降らせた。

冷たい雨が私の体に降りそそぐ。

命の水。雨。

それに触れた瞬間、私は生きているんだと改めて思った。

「やっぱり歌を歌って良かったじゃないですか。こうして雨が降る  
なんてきつと、おたくさんの思いが雨神様のところに届いたんです  
よ」

お隣さんはそういうと嬉しそうにほほ笑んだ。

私はそれを見て、何だかしてやられたなあと思った。

背高のつばのお隣さんには、おそらく遠くにいた雨の神様の様子  
が見えたんだろう。こうしてここにやってくることも分かっていた  
のだ。

ばらばらと雨が降る。

命の水は、私たちの立っている地面にゆっくりとしみこんでいく。  
太陽もやつと空から落ち始め、風も少しだけ涼しくなってきた。

雨神様は魔法の道具が空になると、雨を降らせるのをやめて走り  
去って行った。またドドドドドって地面を揺らしながら。

夕日に照らされたお隣さんを見ると、ゆっくりと花びらを閉じ始  
めていた。私は葉だけの体をゆっくりと内側に閉じていく。

もうすぐ夜が来る。そうしたらお隣さんにおやすみなさいを言っ  
て眠るのだ。

「ねえ、夕日がきれいですね。こりゃあ、明日も晴れますよ」

お隣さんが楽しそうに言う。輝く太陽を見るのがお隣さんの日課

だから、晴れるのが嬉しいのだろう。

私はビルの向こうに落ちていく夕日を見つめながら、澄んだ空に沈んでいく夕日はお隣さんによく似ていると思った。

「晴れるのはいいですけど、暑いのは嫌ですよ」

私がそういってお隣さんはくすりと笑って、

「じゃあ、あつしの影にいるといいですよ。いくらか涼しいですか」

と言った。

本当に優しくて素敵なお隣さんだ。夏が終われば、お隣さんもいなくなってしまうと思うと寂しくて仕方がない。

それに来年の春になれば、私の花をお隣さんに見せることができると！ きつとお隣さんだったら、私の花を「綺麗だね」って言うってくれるだろう。

けれど、ひまわりは夏にしか咲かない。私の嫌いなギンギラ太陽の燃える季節にしか花壇にやってこないのだ。

こんな素敵なお隣さんに会えるなら、夏も悪くないかもしれない。  
真夏の太陽も好きになれるかも……

私は小さく微笑み、

「ありがとう」

そうお隣さんに囁いた。



## No. 13 未来への絶望

……あなたは絶望という名の意味を、知らなかったかもしれない。ん。

でも今日、気がついてしまったのです。幸ある未来を予見出来ない現実が、影のように迫っていたことを。

薄霧がたゆたう朝景色。この季節、幾たび迎えても好きにはなれません。

湿り気を帯びる風はブロンドの髪をいじめて、重く垂らしてしまいます。

「まったくはつきりしない天気。うつつしいったらないわ。どうしてこんなにべたつくの！」

艶色の唇から、似つかない言葉の弾丸が周囲へと放たれます。

叔父の移住先、ジャパンなのかニホンと呼ぶべきか。そんな不明瞭な国に留学してきて、二年あまり。あなたは駅へと続く道を歩きながら、日本人より正確に紡がれる発音で、この国特有の気候に不満をまき散らしていました。

傘に収まりきらない肩幅を持つ男性が、濡れたスーツを気にするでもなく、あなたに怪訝な目を向けます。ですがそれは一瞬のこと。攻撃的な青い瞳を認めた途端に、ホームまで繋がる階段へと足を伸ばし始めるのです。

「なによ。言いたいことがあるなら、はっきり言ったらどう？」

あなたは上目遣いに視線を飛ばし、煮え切らない態度で去りかけている男性へ、対応を促しました。

ねずみ色をした背中がビクツと跳ねます。男性が驚いた様子で肩をすくめたのです。そしてそのまま叱られることを恐れる子供のように、急ぎ足で階段を上がっていきました。

「ハッ、だれもかれも、これだから日本人は」

回りの幾人にも気づかせないように、ことさら大きな声。湿り気を帯びる大気でも滞らず、無残にも消えていきます。

あなたは苛立ちを隠すことが美德の国にあつて、悲しいほどの無視に耐えるほかありませんでした。届いてるはずのあなたの言葉に、例え表面上でも意識を向ける人はいなかったのです。

「おはようございます。キャシーお姉さま」

唇を噛みしめるあなたに、同じ制服を着た女生徒が駆け寄ってきました。

「お姉さま、遅刻してしまいます。下らないサラリーマンなんか放っておきましょうよ」

「そう、ね。あんな輩やかいに付き合っているほどヒマじゃないわね。こんなことで遅刻したら、目も当てられないわ」

あなたは肩口に並んだ後輩、ユイ・サトミを従えて、いつもの電車が待つホームへとつま先を向けました。

分かつてはいるのです。この国の人々は感情を表に出すことを良しとしないことを。

自らの考えを主張することに躊躇する人種の集まり。出る杭を沈めることだけ考えて、しかもその際だつて表立った行動はしません。

従順な子羊たちの群れ、群れ、また群れ。狼たちに追われるように電車に乗り込む臆病な羊たち……。あなたは渦中にあつて苦虫を

噛み潰した表情のまま、今さらながら流れに身を任せることへ、憤りを覚えてしまいました。

ふとユイが身もだえして、苦しそうにあなたを見上げてきました。個々の存在は微動だに出来ない、揺れる車中です。どこか怯えた伏目がちな瞳が、訴えを放ちま

す。イラつく心中を察しされまいと、あなたは背後の扉に身体を預けて、遠くに視線を逸らしました。

平均的な女子高生よりも小柄なユイは、押し潰されまいと抵抗を張るといふより、ただひたすら時が過ぎるのを待っているようにも見えます。あなたにとって慈しむ存在のユイではありますが、こればかりは手助けなどかなわないのです。

視線の先に設置された簡易モニターでは、昨日のニュースでしよう、ひたすら国会で謝罪を繰り返す（ような）、存在感が希薄で小柄な首相が映っていました。

「んん、お姉さまあ……」

気だるさを含むように、ユイが吐息を漏らします。ひたいの中ほどで丁寧にまとめられた髪が、張りついています。

「もう少しの我慢でしょ。少しぐらい」と、そこで初めてあなたは後輩の異変に気がつきました。

決して発育が良いとはいえない、丸みの小さな体躯。折れそうなほどに線は細く、もろく壊れそうな少女は、声を震わせます。わずかな隆起を主張しているのでしょうか？ 小ぶりな胸が激しく上下していました。

「んあ、うつうつ」

もたれかかってくるユイ。あなたの元へと逃げるように。求めるように。

ひざ下で揃えられてるはずのスカート。そこには何者かによって

強制された、歪な波が刻まれていたのです。

「ユイ、あなたまさか」

うなづくようにユイが瞳をうるわせます。

「手が、手があ……」

混雑する中にまぎれ、己の欲望を行使する不逞な者が、あなたの愛してやまない少女をなぶっていたのです。

あなたは即座に後輩を包み込み、その場で強引に360度回って体を入れ替えました。

その余波を受けた乗客たちが迷惑そうな視線を飛ばします。

文句があるなら言ってみなさい　意志を込めた尋常ならざる青眼で、あなたは回りを黙殺させました。

どうして日本人はこうも道理ならない所作を、しかも隠れながらするのでしょう。

あなたにしがみつくユイは、色気という一点から計れば胸もなく、腰の肉付きも弱く、まだまだ官能の女神に微笑まれています。そんなユイよりも、雄大なロッキー山脈のように連なるバストを誇り、重力に逆らい続けるヒップを持つ自分にこそ、手をかければよいのに。

もちろん、その代償は三倍返して支払わせるつもりあなたですが、どうせ欲望の赴くままの衝動をたぎらせるのであれば、少女というより幼女に近いユイより、女のあなたに挑んでこそ、大和魂を誇る日本男子と呼べるのではないでしょうが。

あなたは未だ怯えるユイに優しく微笑むと、強く抱きしめ、淡いリップクリームが残る唇へと自らの舌をすべり込ませました。

「あ、んんん……」

ゆつくりとユイの口内を味わい、なぐさめます。周囲の目など気にすることなく……。

あなたとて失望したくないのです。これからも小さなこの国で過ごすのであれば、まず手始めに身近な人間を強く支えようと決意しました。

下車した先では陰鬱とさせる雨が変わりなく、降り続けています。

ユイを支えながら、あなたは水たまりを避け、大きな通りに。そこで背後から車のクラクションを浴びせられました。車道を睨みつけて振り返った先では、黒塗りの大きな車体が止まっています。

政治臭が匂ってくるようなその車から、どこかで見覚えのある小柄で初老の男性が、あなたへと近づいてきました。

その男性の周囲には大柄な一様のスーツを着た数人が、まるで小柄な男性を守るように寄り添っています。

「ホワイ？ なんなのアナタたち」

あなたの問いかけを慣れたようにスルーして、その初老の男性は口を開きました。

「これから日本はどこへ向かえばいいのでしょうか……」

この国は、末期だわ。

勢いよくため息をついて、あなたは男性を無視して先を急ぎます。政治からして自

信の持てないこの国は、どうしたものでしょう。

にわかにあなたの胸中を支配してくる、絶望という名の嫌悪感。

もうこんな国、嫌いよ。

それでも絶望から逃れたいあなたは一縷いちるの望みをかけ、後輩とモ  
ーテルにしけこみ、ニヤンニヤンするべく行動を起こしました。  
取り残された要人がポツンと、所在無さげに佇み、二人の女子高  
生を見送っていきます。

結局この国の未来は、煮え切らない雨がこの先もしばらく続くよ  
うに、影が降りかかる運命なのかもしれません……。

く了

## No.14 かみさま。

大事だと前々から聞かされていた約束を破ってみた。

初めての試みに胸が高鳴るかと思いきや、そんなことでは揺らぐことのない自分を思い知っただけだった。

人気のない場所を求め、近所の路地裏に入り込む。以前から噂になっていた空き家に侵入し、放置された庭に座る。制服から伸びるむき出しの足を撫ぜる草の感触。人の手を離れるということは自由になることなのだと思った。

青々とした雑草が風に揺れると、葉と葉が擦れあって叫んでいるように聞こえる。ロックシンガーみたいに、雄叫びだか奇声だか分からない声を出してシャウトする。不平不満を吠え、自由を歌う。ざわざわ、ざわざわ。草ばかりが自由で、なぜかとても悔しくなってしまった。波打つ草の上に身体をのさばらせる。どうだ、これでもう叫べまい。あたしはあんたたちの自由をこんなにも簡単にうばってしまえるのだ。

視界には空。耳には草の遠吠え。あたしは無言で、呼吸を繰り返す。

背中が地面に密着しているとこんなにも安心できる。なぜもつと早く気がつかなかつたのだろう。立つて歩くということは無防備なのだ。見えない部分が多すぎて不安になってしまう。けれどこうして身体を横たえれば、見えないものなど何もない。寝そべりながら生きていくことはできないだろうか。そんなことを考えながら目を閉じた。

失敗したと思ったのは眠りに落ちる寸前。

たとえば横になったとしても、目を閉じて耳をふさいでしまえば何

の意味もないじゃないか。

灰色に濡れた家の前。赤い点滅。鈍いひかり。何度も振りかざして、振り下ろす。生温いものが跳ね返って顔をくすぐる。いくらこすってもその感覚だけは消えずに残って苛立ちがつのる。それでも手は止めない。何度も何度も、それ目がけて振り下ろす。

顔がむずがゆくて、目が覚めた。

空はオレンジのグラデーション。遠くは紫がかっている。ぼやけた視界の端でとらえた星はふるふるとふるえていた。一番星を見つけたと思ったのに、いまやはっきりした視界にはいくつもの星がふるえている。草と同様に星も何かを訴えているのだろうか。

ロックシンガーたちはさらにその活動をさらに活発化させ、眠っていたあたしの顔に報復していた。すっかり草まけしてしまった頬をこすりながら体を起こせば、また後ろが見えなくなってしまった。潔く立ち上がり、靴底で草を擦りつけるようにして歩き出す。叫び声など耳に入らない。振り返ることなく、空き家の庭を後にした。

路地裏から住宅地に抜けると目的もなく歩いた。疲れているのか足の動きが鈍い。

焦げた赤をうつすアスファルトに伸びる影。反響する足音。それが自分のものだけではないと気がついたとき、一瞬にして背筋が凍りついた。過剰なほど体が強張り、それを振り切るかのように首を回す。大分離れた所を歩いていたスーツ姿の中年はあたしの異常な行動に驚いた様子だったが、一瞥をくれるとすぐさまわき道に消えた。誤解を与えたかもしれない。しかし、追いかけて謝ることなど現状では不可能に思えた。

頭が痺れるほどの頭痛。耳をつんざく動悸。ふるえる膝は身体を



支えきれずに崩れる。しゃがみこんで胸を押さえ、荒い呼吸を幾度となく繰り返し返した。じわりと歪む視界。遠のく周囲の音。アスファルトに点々と作られていく染み。もう枯れ果てたと思っていたのに、なんだ、この涙は。これは何のための涙なのだろうか。

ああ、面倒くさい。胸を押さえて笑う。人間という生き物はなんて面倒なのだろう。傷ついた、傷つけられた。そんな経験は誰もがしていて、それを教訓にして生きていくか、トラウマだといって叫ぶかはその人次第だ。けれどあたしは生きること、叫ぶことも涙を流すことも、立って歩くことも面倒で仕方ないのだ。

呼吸を繰り返し返す、心臓が血液を送り出す。何もしくともあたしの身体は生きるために働いている。ならばそれで十分じゃないか。涙を流すなんて、どうしてそんな余分な機能を与えてしまったの。余計お世話だよ、神様。

押さえていた胸がふるえだした。携帯電話のバイブレーションだった。手を放して、深くしっかりと呼吸をする。あたしはまだ生きているのだということを確認する。さっきまであんなにも乱れていた呼吸と鼓動が静まっていくのがわかる。

コンクリート塀に背中を押しつけると携帯電話を開いた。メールが一件。頬が緩んでいく。神様は悪口には敏感で、あたしのことなどお見通しなのだ。

昔から、誰もが一度は神様に祈ったことだろう。しかし、神様は何もしてはくれない。ただ、見ているだけ。そもそも本当に存在するのかさえ怪しいものだ。ここぞというときに頼りにしても、手を貸してくれることなんて絶対はない。それが神様の定義。でもあたしの神様は違う。こうしてあたしにメールをくれる。

ほのかに光るディスプレイに開かれていない封筒のイラストが表示されている。ボタンを押せば、件名には『神様』と書かれていた。続けてボタンを押す。そこにはいつも、たった一行だけのメッセ

ージ。

『アシタノテンキ、キット、ハレ。』

携帯電話を胸に抱いて走り出した。明日は傘を持っていかなく  
てはならない。

\*\*\*

本当のところ、家に帰るつもりは毛頭無かった。ただ、神様が明  
日は晴れだと告げた。だったら傘が必要になると判断したまでだ。  
傘は家にある。頭が指示して、足が勝手に走り出した。それだけだ。

玄関の前に立つと、ほんのわずか視界が揺れた。スカートの汚れ  
を払い落とし、制服の袖で顔を拭う。力強くこすってしまったため  
にひりひりするが、ちょうどいい。ここからは気合いを入れなけれ  
ばならないのだから。

息を吸って吐き出すのと同時に鍵を差し込み、ゆっくりと回して  
ノブをひねった。そのままの状態で隙間に身体を滑り込ませる。誰  
もいないことは分かっているのに、これほどまで慎重になっている  
のは万が一のことを考えてだ。狭い玄関では足を動かしただけで音  
が広がってしまう。身体と腕を伸ばすだけ伸ばして、目的である傘  
を掴もうとした。

「あら」

聞こえるはずがない声がして、反射的に身体が跳ねた。すぐさま  
手を引っ込め、扉に背をつける。心臓が脈打っている。脳まで響い  
てあたしを侵す。

「お帰りなさい。今日は、その、どうしてこなかったの。大事な日

だって分かっていたでしょう」

母の視線がそれた。その隙に靴を脱いで家に上がり込む。呼び止める甲高い声に振り向くことなく階段まで急いだ。母はあたしを待ち構えていたに違いない。今日は夜までかかるのだと、あれだけ繰り返し聞かされていたのに。

階段に足をかけたとき、頭上から影が差した。

これだから見えないのは嫌なのだ。こんなモノに会うくらいならそのまま外に出してしまえばよかった。家になど戻ってこなければよかった。姿を確認せずともソレが何であるのかすぐに分かった。そんな自分にすら悪寒が走る。

「おかえり、チヒロ」

名前を呼ばれて、舌打ちを返した。その口であたしの名前を発するなんて鳥肌が立つ。アレは数段先で行く手を塞いだまま動こうとしない。そこから消えてくれと言うのも嫌だ。同じ息を吸うのもごめんだ。見られていることにも吐き気がする。その声が耳に入るだけで全身が腐っていくような気さえた。

「今日はお前の誕生日だろう。みんなで飯を食わないか」

繰り返す呼吸が荒くなつて、心臓が破裂してしまいそうだ。割れそうな頭を押さえると振動が足元を揺らして、ソレの指先が見えた。触るな、人殺し」

声の限り叫んで、ソレを突き飛ばし階段を駆け上った。部屋に入り、鍵をかけるとドアに背中を押しつけた。足にまったく力が入らなくて、床に座り込んだ。脳が頭の中で暴れている。ぐらぐらと煮えて水泡が弾けるたびに痛みが走る。心臓も脳と結託してか、同じような行動をとってみせた。口の端から垂れる唾液を拭うこともせず、痛みに耐えた。

「かみさま、神様神様……」

神様、助けてよ。お願いだから助けて。

抱きしめた身体の中心で、かすかなふるえを感じた。

今日はあたしの誕生日でもあり、父の三回忌でもあった。

父は生まれつき体の弱い人だった。入退院を繰り返して、いつもベッドに寝ている生活ばかり送っていたが、家にいるときには必ずあたしの相手をしてくれた。優しいという言葉はこの父のために作られたものだと言っても過言ではない。優しく、優しいばかりでどうしようもない父だった。

あの日。二年前のあの雨の日。

当時、兄はひどく暴力的だった。何かにつけては頭にきたといって、母やあたしを殴りつけた。さすがの兄も退院したばかりの父の前で拳を振り上げることはなかった。しかしその積もりにも積もったのだらう鬱憤は、あの日あたしに向けられた。

兄は父が通院で留守にしている時間を狙ってあたしを激しく殴り蹴った。原因なんて些細なことだった。このままでは本当に殺されると思い、家を飛び出して父の病院まで走った。雨が傷を打って、激しい痛みを訴えても踏み出すことをやめなかった。優しい父がきつとあたしを助けてくれると思ったから。しかし、たどり着いた病院に父はいなかった。すれ違いになってしまったらしく、自宅に戻ったと告げられてそのまま引き返した。雨の音がうるさくて、耳に突き刺さるようでもたまらなかった。

灰色に濡れた家の前には赤いランプが点滅していた。

雨の音に被さるようにして響くサイレンの音。走り出す車。立ち尽くす兄の後姿。

自宅に帰った父は暴れた兄の惨状を目の当たりにして発作を起こし、病院に運ばれたのだと後から母に聞かされた。運ばれたまま、もう戻ってはこなかった。

兄を恨んだ。その首に包丁をつきたててやりたいくらいに。父を殺したのは兄だと思っていた。昨日までは。

携帯電話を開けばまたメールが受信されていた。

生前、父が登録してくれたのは神様のお告げで天気を知らせるという実にくだらぬいメールマガジンだった。これであたしが雨に濡れることもないと安心したように笑っていたが、この予報が当たることはなく、いつも反対のお告げばかりを送って寄越す。神様はとんでもないうそつきだ。

ボタンを押す。メールをひらく。

『アシタノテンキ、キット、ハレ。』

お父さん、きっと明日は雨になるよ。だって神様はうそつきなんだもの。あたしを助けてくれないんだもの。

父の笑顔がまぶたの裏に浮かんで、すぐに消えた。

携帯電話を胸に抱えてベッドに横になる。受信ボックスは神様からのメールでいっぱいだ。

あたしは神様のうそを見抜けるようになった。明日の天気は雨。父を殺したのは兄。あたしじゃない。あの日、あたしの後ろには誰もいなかった。誰も追いかけてこなかった。足音なんて聞こえなかった。後ろなんて見えなかった。だからあたしは何も知らない。夕べの母の告白も、兄の懺悔も謝罪もあたしの耳には入らなかった。だってそれは、全部うそなんですよ。

うとうとと、まどろむ。携帯電話を抱えたままで。

あたしは夢の中で、また兄を刺すのだろつ。

灰色の雨の中、包丁を振りかざして何度でも。後ろから聞こえる足音に耳をふさいで。

この胸でふるえるうそつきの神様を信じて。



## No. 15 彼と彼女と夏の雨

彼女が新しい仕事場や向かうのにこの古びた借家からは三十分ほどかかる。異動する前の仕事場と比べれば街の大きさも、交通の便も悪い訳だが、彼女は今の環境に満足していた。それもただ、愛する彼と一緒にだからだ。住み慣れたビルのアパートを出て行く寂しさもあつたのだが、彼と一緒にの事を考えればそれでも苦ではなかつた。家に帰れば朝も夜も一人の生活では味わえない誰かがいる温かみが嬉しかったのだ、それ以上にあの彼が共に住んでくれることが嬉しかったのだ。

「行つてくるから」

彼女は玄関から静まり返る室内に声を掛けると半年前、ここに引越してくるときに新しい仕事場だからだと買ったハイヒールを履き、外へ出た。夏の朝八時ともなるとまだ早い時間とはいえあの日差しを浴びると夏特有の暑さを感じる。一面蒼々しいこの美しい空も、この暑さがなければと彼女は常々に思う。都会と比べればこの空は澄み切っている。毎日、曇り掛かつた空を見るよりはこの暑さがあつた方がましなのだがとも思っているのだが。

彼女が住んでいる借家ではあるがこの家には二台ほどの駐車スペースがあり、そこに一台彼女の車が停まつている。彼も免許は持つていたが車を買う金も、その金を稼ぐ労力も彼は持ち合わせてはいなかつた。そもそも免許でさえ、彼が大学在学中に親の薦めと財力で自動車学校に通い、会得したものだ。決して彼本人がほしかった訳ではなく、やや過保護気味な彼の親が取らせたものなのだ。彼女は駐車してある車へと向かうとオシャレ気のないセカンドバックを漁り、小さなマスコットのついたキーを取り出し、愛車のドアを開ける。温められた車内の重い空気を身体に浴びながら彼女は乗り込んだ車にエンジンをかけ、車内に冷房を掛ける。このなんとも

いえないどんよりとした空気に浸かっているよりは身体が冷えたとしてもクーラーをつけた方がいいとそのまま冷房の調整するつまみを最大まで上げてそのまま会社へと行く為に家の目の前の道路へと向かった。

会社までの三十分はなかなか貴重なものである。車のラジオから流れる洋楽に耳を傾けながら彼女は思った。自分の気持ちの整理が出るからであるからだ。都会と違って朝のラッシュとなるものも少ないのだが、都会にいるころ、彼と同棲する前は彼のことばかり考えていたが今は彼以外のことを、要は自分のことを考える時間が出て来たのだ。

例えば、今日のお昼は何にしよう、今日の仕事の内容、これからのこと。

しかし決まって会社が見えてくることには彼との夕食のメニューの事に頭が行ってしまう。彼女は料理が上手くなかった。

一週間ほど前までは密かに練習していたのだが、それも今では三日坊主と化してしまった。

「今日は……ハンバーグがいいかしら」

職場の友人から教えてもらい彼女は一度は食べてみたいと思っていたお店があった。そこならば彼も喜んでくれるだろう、と彼女は少し微笑んだ。最近の彼は外出してないせいかあまり顔色が良くないから栄養が必要だろうという気持ちもあったのだ。もちろん自分が食べたいからというのもあったのだが。

あと一つ、信号機を過ぎれば彼女の会社が見える。今日も長い一日が始まるだろう。しかし、彼女から嬉しそうな微笑みは当分消えることはなかった。

彼女にとってこのラッシュの三十分ですら、幸せの時間なのである。

「ねえ、どこか食べに行こうよ」

時計の針はようやく十二時を回り、ようやく肩の力を緩めた彼女の



同僚であり友人であるミカは機嫌良く彼女の肩を叩いた。ええ、と彼女は財布やらなんやらが入ったバックをひよい、と持ち上げるとそそくさと不機嫌そうな上司になど目もくれずにミカと共に仕事場から出て行った。外に出れば面倒な打ち込みや、コピー、そしてあの上司のいやらしい視線から逃れられる。たった一時間だったが、彼女たちにとってその一時間はストレスから解放される大切なものなのである。

カフェテリアや、美味しいと噂の洋食屋へ赴き、昨日あったこと、取引先の格好の良い男のこと、そして彼のこと。そんな風に目的もなく、だらだらと話すのだ。

昼飯を食べ終え、コーヒーを飲みながらミカの話に適当に聞き流し、適度に相打ちを入れる。そんな事が彼女の毎日の日課になってきている。

彼女とミカは、新しい仕事場にやってきてから知り合いになった。彼女より一つ上だが、年上のような感じがなく、いつも子供っぽいミカに彼女は好意を抱き、信頼していた。彼女とはまた違う人間だからかもしれない。

「そういえば」

ミカはダージリンの入った白く薄いティーカップを手前に置くと珍しく深刻そうな目で彼女を見た。

「この前、マサル達と飲みに行った時に、あー、なんて言ったかな  
彼氏、ほら、この前連れていたあの人、その彼氏さん私見たのよ。  
なんか感じ悪い女の人と一緒に。ねえ、もしかしたら浮気され」

「大丈夫よ」

彼女はコーヒーを口に運びながらミカの話を遮った。

「もう彼、二度と浮気しないから」

「そんな証拠にもない事言えるわね。そこまで信じられるもん？」  
ミカは目に笑みを浮かべながら悪戯っぽい目をした。彼女は少し表情を歪めたが、すぐに表情を戻した。

「私達は愛し合ってるから」

「それはそれは。私なんかすぐに心配になっちゃうんだけどなあ」  
「ミカの彼も同じような心配しているから大丈夫よ。やっている事もミカと一緒に」

「それどういう意味よ。私は浮気じゃなくて遊んでるだけよ」  
「それならいいわ。彼もそう思っただけだから」

彼女は、空になったコーヒーカップを置き、ごちそうさまとセカンドバックを持ち立ち上がるとそのまま不敵な笑みを浮かべながら店の出入り口の肩へと歩いてゆく。

「あつ、お会計」

伝票を片手にその後をミカが追う。結局は代金はミカ持ちになるのだが。

夏の十二時過ぎともなれば朝とは比べ物にならないものくらい日差が増し、太陽が天を支配する時間が来る。もわもわしたコンクリートの道路の先には屋気楼のような景色すら見える。クーラーの効いたカフェテリアとはまるで別世界に、じわりと湿る背中の中を汗を感じながら彼女らは仕事場へ向かう。

「空……」

ふと顔を上げるとそこには、青い空の一角にはやがて空を覆うのか、今は山の傍に隠れている雲、入道雲が遠くの空へ見えた。

「夕方には雨かもね」

彼女は、ぼそりと呟いた。

彼女は夏が嫌いだった。彼とのあの思い出があるまでは。

彼と知り合った大学時代、駅までの道での突然の大雨に折畳みの傘もその時は運悪く置いてきてしまったし、知人も近くにはいなかった。駅までは十分近く、歩いたとしてもずぶ濡れになることは免れないだろうと彼女が諦め掛けた時、そつと、傘を差し出したのが彼女だった。えっ、と振り向く彼女に彼は、

「駅まででしょ？」

と照れながら笑った。彼にとっては作り笑いだったのかもしれない

がその笑顔が彼女の人生を変えた。あんな気持ちは彼女にとって初めての事だった。駅までの十分間、そして電車でのあの会話の内容は無我夢中だった彼女はほとんど覚えてないのだが、彼のあの笑顔だけはいつまでも彼女の心に残っていた。

今から考えれば彼女と彼が付き合い始めたのは四年も前になる。彼女としてはあの笑顔からの片思いがいあったのが当時、彼はそんな彼女の気持ちなどまったく分かっておらず、もしかしたら分かっていたのかもしれないが、彼は他の女性と付き合いったり、一晩、遊びだけの付き合いがあったりした。大学二年の頃から彼女と付き合い始めてからでもあまりその遊び癖は抜けず、彼女の目を盗んでは遊びまわっていた。まあ、彼女と目を盗んでいたとはいえ少なからず彼女もその癖は知っていた。大学在学中は彼と別れるのがいやで何も言っていないかった彼女であったが、二人で大学を卒業し彼女が彼と同じ、地元の企業へ就職してからは彼と会う時間も必然的に減り、彼女の心配も増してきた。

彼の携帯をチェックしたり、彼の部屋の臭い、床に落ちている髪の毛や郵便ポストなどを彼の居ぬ間に調べるようになった。女性からのメールは削除し、そのメモリーは消した。彼女のこの行動に彼は少し恐怖すら抱いたのだが、遊びだけの安い女たちと比べれば未来がある彼女のほうが彼にとっては魅力的だった。彼は我慢できたのだ。

「……彼、私がない間にまた遊んでないかしら。この前の女だったしつこそうな顔していたし。まったく困るわ」

ミカと共に定時六時に会社を出て、これから遊びに行くというミカと別れた彼女は今日の夕飯であるハンバーグを買い終え、帰路に着こうとしていた。昼、見えたあの雲はやはり頭上を覆い、今にも降り出してきそうだった。

「雨が降る前に帰れるかしら」

曇りとは言えともまだまだ蒸し暑く、クーラー無しでは生きられない彼女なのだが雨となるとまた事情が違ってくる。

「……あつ」

ぼつり、ぼつりとフロントガラスに水滴が当たる。街中を歩く人々は突然の雨に屋根のあるアーケードの方へと急ぎ足で向かっていたり、鞆の中から携帯で出来る折畳み傘を開き始めた。

「早く帰らなきゃ」

信号が青へ変わり、彼女はアクセルを踏む。

雨は徐々に強くなり始めた。

「ただいま」

彼女は玄関の鍵を開け、朝と同じように静まり返る室内へと声を掛ける。

「雨、降られちゃった」

駐車場から家までの間、雨に打たれた身体を不愉快に思いながらセカンドバックと買ってきたハンバークの袋を下駄箱の上へ置き、暗い廊下の先へにあるバスルームへと彼女は向かう。

「シャワー浴びちゃうからそれから夕飯にしましょう」

ストッキングを脱ぎながらバスルームへと向かう彼女に返る言葉は無い。ベタベタと湿気で纏わりつく服をすべて脱ぎ捨て、バスルームのシャワーの蛇口を捻った。

シャワーの落ちる音だけが家へ響く。

そのまま五分以上は経っただろうか。彼女は静かに蛇口を閉じ、バスタオルを被る。この家には彼女と彼しかいない。すべてを晒し出している彼女に恥ずかしがる理由は無かった。

「ごめんね、待たせちゃって」

リビングのテーブルに座る彼に彼女は笑いかける。

「今日は誰もこなかった？」

暗いリビングの電気を付け、閉め切ったカーテンの先を探り、窓を開ける。むわりとした湿気が入ってくる。

「もう、あの女ことは忘れてよね」

くるりと、彼女は彼の方を向く。

「貴方は私だけを待っていてくれればいいんだから」  
夏のコンクリートに打ちつけられた雨の臭いと、崩れかけた彼から  
発するむせ返るような薰りが混ざり合った部屋で彼女は彼を見つめ  
ながら、ただ、笑みを浮かべるだけなのだ。

「敵襲ー！ 鬼が現れたぞー！！」

怒声と悲鳴と血飛沫と。水無月の小雨の最中、ある貴族の屋敷で起こった惨劇は雨音を掻き消す。

「露姫様、早くお逃げくださいませ！」

「あなたたちだけで逃げなさい。わたくしはここに残ります」

「しかし！」

「いいから行きなさい。自分の命を優先するのです」

侍女にそう命じ、露姫と呼ばれた若い女は、一室で焼ける天井を見上げていた。鬼が強襲してきたにも関わらず、無表情に莫座に座っている。

梃でも動こうとしないその様子に、侍女たちは互いに見つめ合った後、ついに逃げ出してしまった。

姫はそれを目で追う事もしない。炎が迫ってくる中、暫く座り込んでみると、部屋の戸が刀で一閃に割れた。

黒焦げの天井が重心を失い、姫の目前でバラバラと降り注ぐ。雨の雫が彼女の頭にかかり始めた。だが、その視線はずっと前を向いたまま。

そこに鬼が、いたのだ。若い鬼の顔には返り血がべっとりとなっている。額にかかる紫の鉢巻が鬼の頭かしらであることを示していた。

しとしとと降る雨と、それに溶けていく鮮血。

寢殿の畳の上で、露姫は鬼を見た。思ったより、人間らしい顔つきだ。

人間と違うところといえば、少しだけ尖がった歯と頭からちょんと出ている一本の角くらいか。髪は黒い。白い肌に、翡翠色の目。その目元には若干皺が寄っている。

もしかしたら、この鬼は憔悴しているのかもしれないと露姫は気付いた。細切れの呼吸と骨が浮き出た腕がそれを証明している。部

屋から見える庭で家来を殺している仲間の鬼達も、遠目から見ても細っていた。

「……この家の娘か」

意外と澄んだ声で鬼は露姫を見下ろす。

「ええ」

ここで嘘についても意味が無いので、頷く。

目を逸らさずじっと睨んでくる姫に向かって、鬼が一步踏み出す。遠くのほうで、誰かの断末魔の声が聞こえた。それでも姫は座つたまま、鬼が近づいてくるのを他人事のように見つめている。

遂に一尺となった距離で鬼は止まる。

「私が怖くないのか」

「……わからないわ」

水を含んで一層重くなった頭を鬼に向ける。

「わたくしを殺すのですか」

「今迷っている」

「なぜ？」

「今殺している奴らは齒向かってきているから殺している。だがお前は齒向かわない。だから迷っている」

疲れた風に、鬼は刀を畳に突き刺した。迷っているとは言つが、その様子に殺そうとする素振りはない。

露姫が懇願するように鬼を見上げた。

「殺してくださいませ」

「何だと」

思いも寄らぬ言葉に、鬼が驚く。

「親が死んだ今、ここで生き長らえてもどうせ近いうちに野たれ死ぬでしょう。それに元々、わたくしは死ぬつもりでした」

「死にたかつたのか」

「はい。わたくしは親が大嫌いでした。わたくしを娘としてみていない。権力争いにおけるただの道具としか思っていますでした」  
綺麗に着飾らせるのも、美味なるものを食べさせるのも、全ては

殿方を惹きつける美しさを保たせるため。

事実、数年ぶりに会いに来た父親との会話は「帝の側近と結婚させる」だけだった。会話にすらなっていない。

ただ政略結婚の事実だけを告げ、娘の反応も見ずに立ち去って父親。そして、そんな父子に関心を示さず奥に籠り切ったままの母親。母親もきつと、今の自分のような境遇で結婚したのだろうと彼女は思う。父の出世のためだけの契り、母のように引き籠もり続け終わっていく人生。

「そんな一生が目に見えてました。だから、相手の殿方と結婚する前に自害しよう」と

露姫は懐から、短刀を取り出した。これで今夜にでも死のうと思っていたのだ。

段々俯いていく彼女を目前に、一方の鬼は黙ったままその真っ黒な髪を見下ろす。雨の勢いは増していき、彼女の十二単は彼女の体を沈めさせるかのようにどんどん水を含んでいく。

「あなたが殺さないのなら、それでもいいですわ」

重い体を起こし、短刀を自分の喉元に突きつける。目を閉じ、ぐつと手に力を入れた。だが、

「あなた、何を」

それが喉を貫くことは無かった。姫は思わず見開いて、目の前の事実には驚く。鬼が彼女の腕を掴んだのだ。

「お前が言ったのだ。殺してくれと。だから自分で死ぬな」

真っ直ぐな目で、憔悴しているはずなのに力強い口調でそう言う鬼の言葉に、露姫は刀を落とした。そしてその瞬間なぜか涙が溢れ出して止まらなくなる。

先ほど死のうとした時でさえ流さなかった涙が、今は止まらない。まるで雨が、彼女の殺意を流すかのように。

鬼は、その震える肩に、そっと手を添えた。



一カ月後、露姫は鬼達が住む島で暮らしていた。自害を止めた鬼の頭領の屋敷で、妻のような存在として。だが夫婦ではない。夫婦に近く、またもつとも遠い関係だった。

何せ、「殺すから死ぬな」と言った鬼との暮らしだ。夫婦になるわけがない。

そのくせ、寡黙な頭領と物静かな姫という二人で絵に描いたような同居が出来ているのだから、他の鬼たちは「不思議なお二方だ」と口々に言っていた。

ちなみに、露姫は予想外にそんな鬼達から受け入れられた。鬼達いわく、「あの頭領が共に暮らすのを許した人だから」だそうだ。

頭領は口数の少なく、無愛想だが、仲間達からは慕われている。何も言わなくても、仲間思いで鬼達を束ねるに値する賢さを持っていることは周知だからだろう。

鬼ヶ島に来た当初、そんな頭領から彼女は、自分の父親が島にある鉄山を狙っていたと聞いた。近々、兵士を使って攻め入る計画だったらしい。

鬼ヶ島は食物は育ちにくい土地だが、鉄が豊富にある島だからだ。今まで何とか食いつないできた彼らだったが、そんな計画を実行されてはたまらない。ずっと血のにじむ思いで先祖代々鬼ヶ島を守ってきたのだ。何としてでも、この計画だけは食い止めなければならぬ。攻め入れられてからでは、女子供を守れない。

だからやむを得ずやられる前にやる、急襲という暴挙に出たという。

露姫は頭領の告白に憎悪など全く持たなかった。むしろ愛おしさを感じてしまった。先祖が守ってきた島のために人間を殺し、そんな事実にも内心苦しんでいる彼に、だ。

彼は皆々を人殺しに導いてしまったことに後悔の念を抱いている。その心が、彼女には愛おしくて堪らなかった。

彼やその仲間達は、武器にはなっても食物にはならない鉄山を背

景に、不毛な土地を耕す。彼女は夕方頃疲れきって帰って来る鬼達の体を、労わる様に濡れた手ぬぐいで拭く。

「また痩せましたね」

「そうか」

言葉少なに、背中全体についた汗や土を綺麗にふき取る。周りで他の鬼達も女に拭いてもらっている。鬼の中には勿論女もあり、怖がらず接してくる露姫に鬼の女たちは良くしてくれた。

これは暮らしていて気付いたことなのだが、随分人間は鬼に対して偏見を持っている。

今まで彼女は、鬼とは恐ろしく凶暴で強欲でその力を持って人間たちを虐げようとしている怪物だと聞かされていた。

しかし、実際に会った鬼達は陽気な男達が多く、女も大らかだ。

もしかしたら、人間達が姿形の違う鬼達を蔑み、勝手に恐ろしい想像をしているだけかもしれないと彼女は思う。

「奥方、今日は一段とお綺麗で」

夫婦ではないと言っているのに、皆姫のことを奥方と呼ぶ。訂正してもきりがないので最近では頭領も彼女も好きなように呼ばせていた。

「ありがとう。でも美しさで生活は出来ないわ。あなたたちが流す汗のほうがわたくしは綺麗に見えます」

「いやいや、奥方の綺麗なお姿に疲れも吹っ飛ぶつてもんです」

「美人じゃなくて悪かったねあんたたち」

調子の良い鬼の背中を、伴侶の女がぺしつと叩き、辺りが笑いに包まれる。露姫も少しだけ頬を緩ませる。かつて感じたことのない穏やかな生活。

彼女は一度、何故あの時自害を止めたのか聞いたことがある。すると鬼は「お前が殺してくれと言ったからだ」と答えた。

その言葉は止められた時にも聞いたが、今度は幸福感を覚えた。父亡き今、世を憐んで死ぬ気は無い。しかしこの鬼に殺されるのは本望だからだ。

鬼達の笑い顔を見ながら、そう彼女は強く感じる。

その望みは一年後、永遠に叶うことは無くなってしまっただが。

「敵襲ー！ 女子供は家に隠れるー！」

小雨が降る薄暗い昼中。怒声が村中に響き渡る。

「私の名は桃太郎。民の暮らしを脅かすお前達を倒しに来た！」

家来を引き連れ、若い男がそう叫び島にやってきたのだ。桃太郎は人間とは思えない力で次々と鬼達を斬っていく。家来も頭領の屋敷に火をつける。

露姫は、屋敷の門前で攻防を繰り広げる頭領の元へ行こうとした。業火の中廊下を走る。と、向こうから彼の姿を見つけた。

「頭領さま！」

珍しく声を上げ、彼の元へ駆け寄る。すると、力が抜けたように彼は彼女に向かって崩れ落ちた。そのまま二人で座り込む。抱き抱えたその背中に刺し傷を見つけ、露姫は致命傷だと気付く。

「死んではなりません！」

「……すまない」

かすれた声で呟き、彼はゆるゆると体を起こした。全身血まみれで、意識を保つのもやっとのようだ。赤く染まった手で、姫の目元

に浮ぶ涙を掬う。

「殺してやる、はずだった、のに、な」

途切れ途切れに紡ぐ言葉に、彼女は首を横に振る。

「いえ、まだ間に合います。今ここでわたくしは頭領さまと死にます」

懐の短刀を取り出し、手渡す。その刀を見つめて、彼は呆れたように笑った。

「まだ持っていたのか」

「ええ、いつでも頭領さまがわたくしを殺せるように」

「そうか」

彼らは見詰め合う。その瞳にはお互いしか映っていない。

そして、

「後からすぐ、私もいく」

彼が短刀を姫に向かって振り翳した。

嗚呼やつと。心の中で姫が呟く。その瞬間。

「……頭領さま」

呻き声と肉を貫く鈍い音がした。

力を失った彼の体が彼女の側で沈んでいく。その前方から、血に染まった若い男が現れた。桃太郎だ。

紅蓮の炎の中、鬼の亡骸を抱いて彼女は呆然と桃太郎を見上げた。いつかの、鬼と初めて出会った時の様に。

そんな彼女をどう思ったのかはわからないが、桃太郎は笑いかけた。

「危ないところでしたね。人間を苦しめる悪い鬼は倒しましたよ。

さあ、帰りましょう姫」

この男が、頭領を殺し、自分が頭領に殺される機会を永遠に奪ったのだ。突然血が逆流するような感覚が押し寄せる。その自分の状態に露姫は戸惑う。だが、暫く黙った後。

「はい」

彼女は頷いた。

美しい姫に、彼は嬉しそうな顔をして手を差し出す。

その手を取って露姫が立ち上がる。頭領の亡骸は、見ない。屋敷を出る途中で倒れていた鬼達にも見向きもしない。

「母上や父上から、この鬼達が人間を襲い金品を奪い姫を攫ったと聞きました。それで私はここに来て彼らを退治しようと思ったのです」

爽やかな声で、見るからに好青年の男は言う。

彼女は静かに「そうですか」と相槌を打つ。

鬼ヶ島にあった鉄や金品を、家来に根こそぎ船に積み込ませ、桃太郎は露姫と船頭に立つ。

「貴女も久しぶりに故郷に帰れますね。辛い生活を耐えてきたのです。これからはきつと幸せになれるですよ」

そんな言葉を平然と言い放つ桃太郎の顔を、露姫はまじまじと見つめ返した。

彼の顔が、よつぼど「鬼」のように見えたのだ。

一年前あの鬼と出会った時には感じなかった、憎悪の種が心の中心で芽を出すのを感じる。

頭領が死んだと同時に起こった変化が、種をまいていたようだ。ぽつりぽつりと、だがしつかりと根は張っていく。

鬼を奪われたことが、これほどまでに自分に激情を持たせるとは思わなかった。だが、自分の感情を彼女は素直に受け入れる。

なぜなら、自分の幸福を奪った男を更に奪えば、全てを取り戻せる気がしたからだ。

桃太郎に向かって、彼女が微笑みかける。

「はい。これからあなたさまと暮らせばもっとわたくしは幸せになるでしょう」

露姫は、懐で短刀を密かに握り締めた。目の前の「鬼」の寝首を、

いつか掻き切るであろうそれを。  
その殺意だけは、梅雨にも流せそうにない。

鳴り響いた軽快な電子音が、読んでいた小説の世界から現実へと私を引き戻した。見上げれば壁の時計の針が三時を指している。箱から飛び出した小人たちは、それぞれがそれぞれに定められたコミカルな踊りを黙々とこなしていた。

薄暗いリビングに人形たちのワルツと、振動する水槽のモーター音が響いている。その隙間を縫うようにして細い雨粒の音色が混ざり込んでいた。

開いていたページに栞を挟んで小説をテーブルに置く。隣に置いてあったカップを見て、コーヒーを淹れていたことを思い出した。一口も口をつけなかったドリップコーヒー。とっくに冷めきっているそのコーヒーを私は手に取った。

黒々とカップの中で揺らめく液体を見つめる。波紋の中にじつと私を見上げる顔が浮かび上がる。精気のない疲れ果てた顔だ。虚ろな瞳でじいっと、私の奥を見返している。さざ波に隠した大海のうねり。

カップをテーブルに戻した。少し気分が悪くなっていた。目を閉じ、深く空気を吸い込んで、身体中に酸素を行き渡らせる。吐き出す息に堆く積みあがったもやもやが、少しでも乗って出てくれたらいいなと思った。

暗闇の中で時計の音が止んでいるのに気が付いた。目を向けると小人たちはまたまあるい木枠の中へ帰ってしまったようだった。ぶーんと、水槽のモーター音が少しだけ大きくなったような気がする。こぼり。水面に浮かび上がった熱帯魚が声を発した。

テーブルに肘を突き、添えてあったスプーンでコーヒーをかき混ぜると、コーヒーはぐるぐると勢いよく渦を作り始める。これなら私の顔など見えなくなってしまっただろう。そう思うとなんだか安心した。私は私に見つめ返されたくない。怖いのだ。私という全てに

対して疑問を投げかけられているような気分になってしまう。

ため息を吐き出すと、何処からともなく言いよのない徒労感が這いずり上がって来た。私の手から開放されたスプーンとぶつかってカップが小さな悲鳴を上げた。

私は雨が嫌いだ。あの音が嫌いなのだ。だから、雨が降るといつも憂鬱になる。全てを壊したくなる。どうしてもこの世界を憎らしく思ってしまう。それはひとえに私の中で雨が決して消すことのない幼い日の記憶と強く結びついているからなのだと思う。

全て過去の、過ぎ去った遠い傷跡だというのに、未だに覆われたかさぶたの下で傷は疼き、痛みが蠢くのだ。

目を閉じれば今でも鮮明にあの日のことを思い出すことが出来る。次第に大きくなる雨の音。暗闇の奥から近づいてくる記憶のスクリーン。そこに焼きついてしまった光景は、特にこんな雨の日だと簡単に再生出来るのだ。

浮かび上がる、酒に酔い、叫び、昂ぶった感情をそのまま暴力に替えていた父の姿。そして、その矛先にうずくまる母の背中。まだ幼かった私は、そんな一方的な力の行使に対して何も対抗しうる力を持っておらず、ただ時が過ぎるのを怯えながら待ち続けていた。音を立てて床に散らばっていく食器の数々。なぜかテーブルの上から落ちなかった一升瓶。謂れない罪に対して謝罪しながらうずくまっていた母の姿は、まるでいもむしみたいに弱く醜いものだった。

ゆっくりと目を開く。両腕をさすって、鳥肌が立っているのを確認する。忌まわしい記憶は、その内容が忌まわしければ忌まわしいほどにひどく鮮明に、そして形をもって私の中で保存されている。

時計を見ると、時刻は二十分を回ろうとしていた。そろそろ息子の大輝の迎えに行かなければならない。私はコーヒーカップを手にシンクへ向かうと、コーヒーを全て捨てた。排水溝に向けて、傾いたシンクの表面を黒い液体が流れていく。カップをシンクの底に置き、蛇口を捻って水を流した。



こつやつて、全て流れてしまえばいいのにね。  
カップに注がれ、止めどなくあふれ出す流水を見つめながらそんなことを思った。

開いた傘を雨が絶え間なく叩いてくる。柄を握る右手が微かな振動を感じるくらいだ、思ったよりも強く振っているのかもしれない。少し大輝のことが心配になった。

梅雨時の雨というものは、にじりにじりと降り続きふと気が付いた時にはもう河川を猛らせんばかりに増水させたりするから厄介だ。きつと、まだ幼稚園の中で友達と一緒に遊んでいるのだろうとは思うが、子を持つ親としては正直気が気でない。もし万が一なにかあったら……。もう少し早く家を出るんだつたと、今更ながらに後悔した。

歩調を速めて目的地へと急ぐ。と、目の前から小さく話声が聞こえてきた。傘を少し上げ、視界を開く。道の向こう側からやってくる親子の姿が目に入った。距離が狭まるに連れて、会話の内容がはつきりと聞こえてきた。

「うわあ。すっげえみずたまり。ねえママ、すごいみずたまり！」  
「ちよつと靖矢。入らないでね。靖矢の服買ったばかりで新品なんだから」

そんな母親の忠告など何処吹く風、男の子は意気揚々と水たまりの中へと入っていく。加えて中で飛び跳ねてしまった。着地と同時に飛沫が円状に拡散する。男の子はさることながら、一緒に歩いてきていた母親にも水がかかってしまった。

「コラ靖矢！ 濡れちゃったじゃない」

そんな二人の横を通り過ぎる。すれ違う際に、二人に会釈をした。肌の若い優しそうな母親が柔和な笑みを湛えて会釈を返してくれた。雨の道を歩きながら様々な物事を目にする。先ほどの親子に然り、時折目に留まるアジサイに然り、私にはあまりいい印象のない雨だけれど、いたるところに素敵な場面があることを私は知っている。

たくさんあるのだ。

そしてそれはきつと幼稚園に通う子供たちの方がよく知っている。水溜り、雨の音、傘を打つ断続的なリズム、カエルの鳴き声。それら全てに対して、彼らは驚きを表し、がむしやりに楽しむことが出来るのだから。見るもの感じるもの全てが新鮮で楽しくて、心の底から毎日を謳歌している彼らの世界は、きつととても素晴らしいものなんだろうなと、時々考えてしまう。私にもあつたはずの幼い煌めき。一体どこへ行ってしまったのだろうか、どうしようもなく虚しくなる時があるのだ。

それでも、失くした分だけ得たものがあるのだと今の私は自らに胸を張って言い聞かせることが出来る。

幼稚園が近づく。歩調は更に速くなり、門を通り過ぎるや私はすぐに玄関の受付に顔を出した。髪を後ろでまとめた保母さんは少し驚いた後、季節を先取りしたひまわりのような笑顔を浮かべて大輝の名前を呼んだ。私はそのまま玄関で待つ。保母さんは奥から大輝を連れて来てくれた。

「今日は大輝くん、お外で遊べなくて少し残念だったみたいです」  
そう言つて気持ちのいい笑顔を向けてくれる保母さんと二、三言葉を交わしてから、私は大輝の手を取った。

「帰ろうか」  
「うん」

たったそれだけの言葉を交わすだけで、私の心に花が咲く。前歯が抜けた、少しへんてこりんな顔が満面の笑みを浮かべてくれるだけで、暗い影を落としていたわだかまりや悩みがどこかへ飛んでいってしまう。

いや、どこかへ飛ばさなければいけないのかもしれない。

繋いだ手。小さな温もり。これが今の私の宝物なのだ。私が手に入れたもの。手放さない、守りたい、大切な煌めきなのだ。

雨の中へ二人で足を進める。大きな傘の中に、合羽を着た大樹と二人きりだ。

「でね、しょうこちゃんがひけるっていったから、だいきもひくっていったの。でもしょうこちゃんひかしてくれなかった」

「残念だったねえ。次は翔子ちゃんが座る前に席取っちゃわなきゃ。でも、翔子ちゃんもうピアノ弾けるのね」

「だいきも。だいきもできたもん」

「ああ、ごめんごめん。大輝もだね。大輝もピアノ上手」

そんな会話をしながら二人で歩いていく。繋いだ手をぶらぶらさせて、ゆっくりと雨の音色を楽しむかのように。本当のところ、大樹の黄色い合羽はかなり目立つのだけれど、大切な宝物だから全然恥ずかしくない。ちよつと離れて後ろから見ると、小さな口ポットが懸命に歩いてるように見えて結構可愛いのだ。

「ねえおかあさん、あしたはれるかなあ」

「んー難しいねえ。まだ雨降りだと思うよ」

「そっかー……」

そう言っただけで露骨に肩を落とした大輝の反応が気になった。明日、明日は何か予定があっただろうか。

「どうしたの？ 明日晴れなきゃダメなことでもあるの？」

「……ぼく、あめきらい」

言葉を聴いた瞬間、脳裏に父の面影が再生された。母を否定する罵声。繰り返される暴力。一瞬にして肌が粟立つ。雨音が大きく聞こえ始める。動機が激しく、耳の奥で脈を打つ。

思わず、繋いでいた左手に力を込めてしまった。

「おかあさん？」

大輝がそれに気が付いて私を見上げてくる。澄み切った純粋な瞳だ。私はとっさに破顔し言葉を続けた。

「ねえ、どうして大輝は雨が嫌いななの？」

「え、だっっておそとであそべないんだもん。つまんないよ」

その答えに、私は一瞬思考が止まった。そして唐突に噴き出しってしまった。

「なんだ、そんなことなのかあ」

「そんなことじゃないよ。あめ、だいきらい」

そう言って頬を膨らます我が子の表情を心から愛おしいと思った。大丈夫だ。この子には絶対に私みたいな思いはさせないんだ。強く決意を固めた。もう、過去は怖くない。

「ああ。おかあさん、はやくいえにかえろ」

「ええ、どうしたの？」

「ハイパマンがはじまつちゃう！」

「ああ、そうね。じゃあ、走ろうか」

「うん。おかあさん、はやくはやく」

この笑顔を守りたい。ずっと、ずっと。

「もうおかあさん疲れちゃった。大輝先行ってて」

「ええ、おかあさんもうちよつとだよー」

「ダメダメ。ね、おかあさんもすぐ行くから」

「……わかった」

「合羽だけしつかり玄関で脱いで部屋に家の中入ってね」

頷き、駆けていく背中を見送る。隠し切れない興奮をあらわにする無邪気な背中が愛らしかった。

比べて私の体たらくときたら。すこし走っただけだというのに、完璧に息が切れてしまった。情けない。思わず自嘲的な笑みを湛えてしまった。

家の扉の前に辿り着く。開けっ放しの扉に思わず苦笑が零れ落ちる。そう言えば扉を閉めなさいとは言わなかったような気がするわね。こちらの落ち度かと、玄関の中に入った。

妙な違和感を覚えた。いつもの玄関。傘を傘立てにしまい、靴を脱ぎ、見回してみる。何かが足りない気がした。決定的に足りない何かが存在していた。

そうだ、合羽がない。先に帰ったはずの大輝が脱いだ合羽が、この玄関には存在しないではないか。どういうことだ。もしかして、言いつけを守らずに合羽を着たまま家の中に入ってしまったのだろ

うか。

「ちよつと大輝。合羽は脱いで上がるよう言ったはずでしょ」

声をかけながらリビングへと向かう。だが、開いた扉の先に大輝の姿はなかった。テレビはおるか電気すら点いてない。私が出た時のまま時間が止まっていたかのような錯覚に陥った。

なんだ。なにが起きたのだろう。慌てて、私はリビングから飛び出す。再び舞い戻った玄関には、よく見れば大輝が履いていたはずの長靴の姿もなかった。

「大輝、大輝。何処にいるの。隠れてないで出ておいで」

声を荒げ、家中を探し回る。寝室。子供部屋。トイレ。押入れ。

けれどどこにも大輝がいない。どうしてだ。ついさつき別れたばかりだというのに。

いないいないいないいないいない。

どこにも大輝がいない。

訪れた脱衣所から出て、ため息混じりに私は洗面台を見た。薄汚く汚れた鏡が目の前にあった。台の上に置かれたタオルを手に、まるで導かれるかのように私はその汚れを落とし始める。次第に輝きを取り戻していく鏡を目にしながら、私は知らず知らずの内に涙を流していた。

鏡が全てを明らかにする。見えなかった家の中を、見えなかった私の実像を、見えなかった私の記憶を、全てを照らし出す。

汚れを落とし切り、タオルをそつと台の上に置いた私は、目の前に映し出された私という実像を見て思わず顔を覆った。

父ではなかったのだ。母ではなかったのだ。そしてあの時。あの記憶のスクリーン。私の後ろにもうひとりいたのだ。泣きじゃくる大輝。怒り狂った夫は、遂にその矛先を私からあの子へと向けて……。

手を外す。目の前の鏡には独りの老婆。その眼からは大粒の涙が溢れていた。

鎖樋に溜まった雨水は、静かに時を告げている。

君は知らない。

そばにいられるだけで、どんなに嬉しいかを。

一緒に同じ空気が吸える。同じものを見る事ができる。

毎日顔を合わせる。他愛のない言葉を交わす。

それだけで良いと思っっているのに、時々苦しくなる。

こんな想いを、たぶん君は知らない。

「部活動の予算会議、意外と早く終わったね」

肩からずり落ちそうになるバッグを背負い直し、曇り空を見上げて文月が呟いた。二人並んで、校門までのだらだら坂をくだる。左手には、こんもりとした林が続き、濃い緑の葉を茂らせていた。

「予算つつつても、決められた枠の中で、各部活が分捕りあうだけだからなあ」

柔らかそうな栗色の髪に縁取られた、整った横顔を眺めて答えた。生徒会役員になろうと思ったのは、文月が立候補すると聞いたから。一緒に活動できれば、顔を合わす機会も増えるだろうと思った。きわめて動機が不純だが致し方ない。

会議中の真面目くさった顔も良いが、こうやって二人だけで帰る時の、のほほんと緩んだ表情も好きだ。

西高副会長の永森文月。皆の前ではキリリとしているが、話してみると気さくで天然キャラも少々入っている。名前通りの文月（七月）生まれ。彼氏はいて当然と思われるが、今のところ噂先行で、その実態は掴めていない。

当初の目標は達成できた……と思う。問題はここから先だ。俯い

て小さく溜め息をついた。

「ねえ、拓。雨の匂いがするよ!」

文月は突然立ち止まり、鼻をひくひくと蠢かせた。

「拓」と下の名前で呼ばれると、だいぶ親しくなった今でもドキリとする。自分は文月にとって、特別な存在なのではないか。そんな筈はないけれど、期待ばかりが膨らんでしまう。

「雨の匂い?」

問い返すと、罪作りな女は、まだ犬のように何かを嗅いでいる。

「そう。竹の子がニヨキニヨキって伸びるような香りがしない?」

文月は時々、突拍子もない表現をする。良く言えば個性的だが、それについて行くのは中々大変だ。女王様が竹の子ニヨキニヨキと主張する匂いを求めて、息を胸深く吸いこんでみた。

今日は雲が重く垂れこめ、湿度が高い。草いきれと土の匂いが混じったような、もあっとした空気を感じる。

「うーん、強いて言えば、土の香りだな」

「それぞれ。この匂いがすると、もうすぐ雨が降ってくるの」

「文月はいつの間にも気象予報士になったんだ」

言い合うそばから、額にポツリと雨粒が落ちる。

「……ほんとに降ってきた」

驚いて天を仰ぐと、文月は自慢げに「ほらね」と微笑んだ。

水滴が、アスファルトを斑に染めていく。まばらだった水玉模様は、見る間に密度を増した。

「どうせなら、もっと早くに予報してくれると助かる」

「濡れたくなかったら、ゴチャゴチャ言わない。走るよっ」

文月は軽快なピッチで走り出す。慌てて後に続いた。

黒のローファーが力強く路面を蹴り、校門を通り過ぎる。中学時代に陸上部だったという彼女のランニングフォームは端正で、速い。



紺とグレーに水色のラインをあしらった制服のスカートが、数メートル先で揺れる。追いつけそうで届かない距離が、文月と自分の現状を表しているようで、なんとなく癪だ。

スカートとハイソックスの合間に覗く、膝裏のへこみまで愛らしく思えるのだから、我ながらどうかしている。

「文月！ スカートが短いぞ」

「皆これくらいだよ。風紀委員でもないくせに、うるさいってば」  
雨脚が強くなっている。頬にはりつく髪を払いのけながら、文月はペロリと舌を出して見せた。

普段はまつすぐな髪が、くるとカールしているのは、雨に打たれたせいかもしれない。毎朝ドライヤーに時間がかかると言っているから。

寝坊すると大変！ 拓みたいな直毛だったらいいのに。

汗や湿度によって、ゆるくウェーブを描く文月の柔らかな髪が好きだ。直毛なんて、もってのほか。

あっかんべーなんて、そんな可愛らしい表情をするな。他の誰かに見られたら、悪い虫がついてしまう。

文月の肩を抱く手、他の誰かに笑いかける文月。彼女の隣に並ぶ、自分でない誰か。

そこまで想像して、寒くもないのにぶるりと震えた。

同時に、自身の独占欲の強さにも愕然とする。思わず肩を落としたり。

まだ告白もしていないのに。ああ、これではまるで文月のスカートではないか。

「何ポーっと突っ立ってんの。びしょ濡れになるよ」

訝しげな声がして、ひんやりした指が手首に巻きついた。雨に濡れた文月の手のひらは、しっとりとしている。その感触を確かめながら、彼女に手を引かれるまま再び走り出した。

至福だ。この時間が永遠に続けばいい。

雨でも雪でも、矢でも鉄砲でも降ってこい。文月と一緒にいられるなら、どしゃ降りの雨だって平気だ。

「バケツひっくり返したみたい。どこかで雨宿りしよ」

「そうだな。翁軒まで突っ走るか」

翁軒は、校門を出て坂を下った突き当たりにある、ラーメン屋だ。いつもなら西高生のたまり場だが、あいにくと定休日でノレンはかかっていない。

口の悪い生徒達ならオンボロと呟く店の軒下に滑りこんだ時には、シャツが肌にはりつくほど濡れていた。

「ふーう。参った」

「あつちの空は明るいんだけどなあ。早くやむといいね」

文月の言葉に頷きながら、ずっと降ってる、やまなくていいと、心の中で答えた。二人だけの時間が延びる。こんな雨なら歓迎だ。

あたりは静かだった。近くの国道で、車が水飛沫をあげる音。オンボロ翁軒の庇を叩く、パタパタと密やかな雨音。人通りもなく、聞こえてくるのはそれだけ。

隣に立つ想い人は、雨雲のまだるっこしい動きをぼんやり見守っている。

雨に濡れたままの髪から、ポタリと雫が垂れた。未来の気象予報士に風邪を引かせてはいけない。バッグからスポーツタオルを取り出すと、彼女は当然のように、腕を伸ばしてきた。

その指先をひよいとかわす。

「貸してくれるんじゃないの？」

「聞きたい事がある。この間のカラオケで意気投合した、南高の男子と付き合っているという噂だが」

「そんな噂が流れているのか。早耳だねえ、拓は」

トクンと心臓が跳ねた。

勢いで聞いてしまったが、文月が噂を肯定したら、どうするもり

なのかと自問する。良かったなと笑顔で言えるのか。縁がなかった  
と思いつける事ができるだろうか。

わずかばかりの沈黙が重い。息を詰めて答えを待っていると、握  
り締めていたタオルが奪い取られ、目の前を通り過ぎた。

「カラオケには行っただけど、騒いで歌って帰ってきただけだよ。残  
念ながら」

成立したのは他のカップル、噂はガセネタだねと、彼女は笑いな  
がら髪の毛を拭く。

いつもと変わらない文月の口調に、緊張の糸が一気に解けた。

「そうか、良かった。……いや、残念だったな」

「何が良かったのよ」

「我が校の永森ファンが、皆ホツとしているだろうと思ってさ」

空はだいぶ明るくなっていたが、雨はまだやまない。

諦めて折り畳み傘を開くと、文月が呆れたように目を見張る。

「持つてるなら、なんでもっと早く出さないの」

「文月が急に走り出したから……」

言い訳しつつ傘を差しかけた。傘を出さなかった本当の理由は、  
今さら言えない。

「拓と相合い傘なんて、色んな人に恨まれちゃうなあ」

「んなまさか」

「結構ファン多いじゃないか。知ってるぞ。下駄箱に入ってた手紙  
は、全部読まずに捨てちゃうんだって？ 罪なことするね」

文月が軽く睨みながら言う。

「読んでから捨てたら、もっと角が立つ」

「ひどいなあ。こんな変人のどこがいいんだろ」

コロコロと笑いながら、傘を支える腕にしがみついてくる。

さりげないスキンシップのつもりなのだろうが、惚れている立場  
からすれば、ひどく心臓に悪い。動揺を顔に出さずにいるのが精一  
杯だ。

だから傘を出したくなかったんだと、小さく嘆息した。

ようやく雨が上がり、涼しい風が吹いてくる。束の間の雨は、さつきまでの生温かい風を吹き飛ばしてくれたらしい。

傘を閉じて、まだ腕にぶら下がっている文月とじゃれあいながら、駅までの道を歩く。

こんな風に肩を並べて歩けるのは、一体いつまでなんだろうと考える。

文月が他の誰かと付き合い始めるまでか。それとも彼女のコイバナを、事細かに聞かされる羽目になるのだろうか。

そうなくても、冷静な友人のフリが続けられるだろうか。思いの丈が、つい口をついて漏れたりしないか。

「じゃあ、また明日ね」と、駅前で彼女と分かれた。文月はJRにこちらは私鉄に乗る。

軽い足取りの彼女を見送ると、いつそ告白してしまえばいいと、内なる声が囁く。そして、いやダメだと首を振る。

文月と私は、なぜ同性なのだろう。告白なんてしたら、一笑に付されるに違いない。変人どころか、変態になってしまうかも。

鬱々と歩いていたら、ポケットの中の携帯が鳴った。

『ヒロム〜！ 後ろ、うしろ！ 天使の梯子が下りてるよ。』

とつてもキレイ。見て、見て！

文月『

顔を上げると、JRのホームから文月が大きく手を振っている。

振り返って、雲の隙間から落ちてくるキラキラとした天使の梯子、光の階段を眺めた。

『ありがとう！ いいもの見れたよ。また明日ね。』



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4975e/>

---

【企画】覆面小説家になろう～雨～

2010年10月8日15時36分発行